

第五回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

二〇〇九年度第五回「文芸思潮」エッセイ賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで五回を重ねることのできました今年は、昨年をさらに上回る七〇二篇の作品が寄せられました。たくさんの方々の御支援にあつく感謝しつつ、日本全国および外国から寄せられたそれらの作品を開封させていただきました。応募者の年齢も一〇歳から八七歳までと、すべての層にわたり、多彩豊饒で、力作、秀作がいっぱいの今回の作品でした。心から御礼申し上げます。

例年の通り応募作の中から、まず選考委員会予選担当による第一次選考、第二次選考、続いて第三次選考が行なわれました。それを通過した作品を対象に、選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

本年度はさらにレベルも上がり、魅力のある作品、優れた作品が多く、そのため優秀賞、奨励賞、入選も昨年より多く選出させていただきました。

今号には当選作および社会批評賞、優秀賞を発表させていただきますが、以後奨励賞、入選作も、できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただきたいと思っております。御期待ください。

第六回「文芸思潮」エッセイ賞は明年も若干の変更はありますが、ほぼ同じ要領で募集する予定です。どうぞ奮って御応募くださいますよう、お願い申し上げます。

「文芸思潮」エッセイ賞

当選「天からの闖入者」

—ひとを支えるもの—

多胡 幹 (千葉県浦安市)

当選「さがしもの」

金子みのり (東京都荒川区)

当選「片目」

武藤蓑子 (東京都多摩市)

優秀賞

「亀を焼く—戦争のはざままで—」

寒川靖子 (香川県丸亀市)

「セリエAがくれたもの」

田村マイ子 (メキシコ市)

「ある青年の死」

藤田陽子 (神奈川県厚木市)

「ラマダン」

益田勇氣 (埼玉県所沢市)

「自爆」

木戸竜之介 (栃木県那須塩原市)

「ビワ物語」

田中ひかり (静岡県静岡市)

「死化粧」

吉田徳子 (徳島県鳴門市)

「『広島菜』によせて」安芸遙

(神奈川県横浜市)

「サクラの木」

萩原ルイ子 (千葉県松戸市)

「天国の姉へ」

HANA (東京都東村山市)

社会批評賞

「昨日 今日 そして明日」 島人志 (沖縄県南城市)

「迷路をさまよう、わが国のロボット開発」 田中堅 (滋賀県大津市)

奨励賞

「新潟県北 人形様事情」

ポップ与惣八 (新潟県村上市)

「G」

近藤 健 (東京都練馬区)

「1981年の桜吹雪」

栗山恵久子 (東京都府中市)

「砂漠」

六藍光洋 (兵庫県神戸市)

「プログ炎上」

ばる (群馬県太田市)

「小規模就活」

樋口和美 (東京都江戸川区)

「モンテンルパの霊園」

小島右近 (東京都葛飾区)

「千個のマイルドセブン」

北三平 (秋田県由利本荘市)

「『在日』の友、抗議の焼身」

西島雅博 (東京都三鷹市)

「ナタリーの夏」

八木陸美 (静岡県御殿場市)

「ツバメ」

山口順子 (長野県安曇野市)

「東京離愁」

矢尾博子 (福井県福井市)

「野菊」

木戸博子 (広島県広島市)

「墓石」

吉阪市造 (北海道網走市)

「ちよつと、まだ……はやいで」

丸山 史 (大阪府八尾市)

「ぬかをすくう」

よしずみ敬子 (大阪府吹田市)

「父よ」

鈴木由希 (神奈川県横浜市)

「一本のレールの上で」

林原ちか子 (熊本県熊本市)

「風に、船を、立てろ」

印南房吉 (神奈川県横浜市)



みずき りょう

1942 北朝鮮生まれ
99 小説「祝祭」で
第16回織田作之助
賞受賞
2006 小説「お見合いッ
アー」で第49回農
民文学賞受賞
07 小説「海老フライ」
で第19回労働者文
学賞受賞

生きる力をくれるエッセイ

水木 亮

年々エッセイの応募数が増えていくことは嬉しいことである。そして、新しい感動的なエッセイに出会うのは楽しい。今回私の印象に残ったエッセイについて、述べてみたい。

木戸博子さんの「野菊」は戦前大連で生まれた母親が、終戦を経て悲惨な経験をし、日本に引き揚げて来てからも戦争に翻弄された人生を作者は描く。また「野菊」という歌が、実は母親の女学校時代の恩師石森延男の作詞であることを知り、そこにこめられた不遇な母親の淡い恋心が胸を打つ。切々とした文章がよかった。

供が元気に降りてくる所は、まさに映像的で感動する。欲をいえばエピソードが美しくきれいに処理されていて、奥行きがない。

ぱるさんの「ブログ炎上」は、自分のブログに突然千単位のアクセスがあり、突如攻撃《ブログ炎上》が始まった経過が描かれる。現代的な素材で、しかもどうなるかという緊迫感があり読ませる。とくに手だてをするほどに炎上するというのが、読み手をはらはらさせて読ませる力がある。

寒川靖子さんの「亀を焼く」は、戦時中空腹の子ども達もが、亀を焼いて食べようとする話である。素材としてもやはり書いておきたい、作者には忘れられない事件であっただろう。やけたはずの亀をひっくり返すと、まだ亀は死んでいなかった。その姿に驚き、友達の子は火を消した。六〇年を経ても忘れられない、子ども達にこういう経験をさせた戦争は、子供は言うまでもなく亀にとっても悲劇である。

最優秀賞に選ばれた多胡幹さんの「天からの闖入者」は猫の話である。

母親がもう立って歩くのは無理という医者診断の話が出てくる。その母親が帰宅すると野良猫が天井で四匹子供を産んでいる。母猫は居なくなり、残された一匹の弱い子猫に母親はミルクを与え、猫に励まされるように母親は元

島人志さんの「昨日 今日 そして明日」は文章は粗いが、若者の派遣社員の現代の姿をよくとらえていて、興味がかかる。秋葉原事件の背景にあるものを感じさせる。頑張つて欲しいと思う。

吉田徳子さんの「死化粧」は、作者のどうしても書いておきたい一編であつたと思われる。看護婦として生きてきた作者が患者について「苦難の人生だったと思える人ほど、最後の最後まで苦しみながら逝くことに気づいた」とある。「ハツ子」という不幸な患者を通してそれを描いている。人間死ぬ直前にはお別れにふさわしい安らかな時間を神は与えてくれるという。しかし彼女はそれもなく苦痛のまま亡くなった。そこで作者が死化粧をしてあげる。そして自分の死化粧は誰がしてくれるのか考える。

HANAさんの「天国の姉へ」は、離婚した家庭で母親代わりに姉妹の世話をした姉を描く。サラキンに借金のある父親を抱え、家族がばらばらになる。姉は叔母のところへ居候することになったが、うまくいかずまた父親の所に戻り、精神を患うようになる。妹は自分の暮らしが精一杯で姉にまで手が回らず、姉は自殺してしまう。作者はこの姉に対しての悔恨を描いている。こころに残る一編である。

栗山恵久子さんの「1981年の桜吹雪」は障害のある子供が小学生となり、初めて自分で電車で帰宅する子供を迎える、母親の不安な気持が描かれる。電車が到着し、子

気になる。

ある時母猫が子猫三匹を連れて遊びにやってくる。子猫は一緒に遊び、帰る時間になると、他の兄弟は母猫に戻つたが、この子猫はついに母猫についていかなかった。家に残つたのである。泣かせる。やがて「チビ」と名前のついたこの猫は家出する。母親はあらゆる方法で猫をさがす。諦めかけた日、尻尾のなくなったチビが帰還する。チビは母親が亡くなるまで連れ添つたという。いい話である。このエッセイにはやや、作り話めいたところが諸処にある。それがあまり欠点とならなかったのは、作者の強い思いがあるからだろう。文中、猫を探すための和歌が出てくる。これも仕掛けとして悪くない。

「昨日 今日 そして明日」「ブログ炎上」は今日の時代を写し、「野菊」「亀を焼く」は忘れてはならない戦争の記憶を描いた。「死化粧」「天国の姉へ」「1981年の桜吹雪」「天からの闖入者」は生活の中から、救いのない現実から、いかに力強く生きるかを考えさせる作品であつた。ここにエッセイの力がある。来年をさらに期待したい。



みかみ ひろし

作家
1945 山梨県甲府市生まれ
法政大学中退
1982 「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

謎と現実、記憶の性質

三神 弘

ものを書くとは、読んでから書く、という営みであり、あるいは、聞いてから書く、というのが順序だ。たとえば、人との出会いというのは、その人の声とともに記憶し、また、蘇り、言葉の意味を、声とともに覚えていく。人は、言葉の環境によって育まれ、言葉によって思考する。

エッセイも同じで、何をどのように読んできたのか、どのような言葉を、どのように聞いてきたのかということにかかっていて、その体験、さらには、告白ということになる。固有で、かけがえない声こそが、言葉の力であり、人を動かす。

ところが、表現するとは鍛錬であり、技術でもあるから、

文芸とは何か、作品とはこうであるべきだという思いこみをし、観念に頼ることになる。しかし、一読者にしてみれば、ただ、言葉を読みたいだけであり、声を聞きたいだけである。大勢の読者に受け入れられる作品、などということに腐心すべきではない。

当選作の金子みゆりの「さがしもの」は、妄想に明け暮れる母と、母との関係に翻弄され、こころの定まることのない娘の日常を描く。「小学三年の春に蒸発した母」は、娘が三十になった頃「お金を貸して欲しい」と連絡してきて、おまけに「にやっとな笑う口元の歯は殆どが抜け」てしまった姿で現れたのだという。

さらに、「一カ月後に手首を切った」と、「病院からの連絡で自殺未遂を知った」ことから、事態は急変するのだが、しかし、「今は他人です」とも返答できず、「拒否」もできない自分に、関心は向けられていく。肉親とは何か、母と娘とは何かという問いかけにもさらされていく。

子供の頃「父の再婚」した家庭で育った日々を思い出す契機にもなり、「けれども社会に出て生きていくほどに、私の脳裏にはいつも実母がちらついていた」とも「人間として生きていく上での、挫折、喜び、悲しみを経験する度に、彼女の影が私の中をどろどろに」してきたとも述懐し、「常に実母の存在は私の中にあり、私を苦しめ」てきたとも振り返る。

入選

- 「蘭にも捧げた一生」 山井照緒
- 「銃後の社会」 梨場貞人
- 「螢」 池山弘徳
- 「HUG」 山手春奈
- 「アニタ」 渡辺裕香子
- 「いなくなつた私」 ポーラ
- 「物語る、あるいは物語につなぐ眼」 鳴門達雄
- 「死にたい。」という人から「死なない。」という 人へ」 黒木 華
- 「妖怪万引き婆」^{はばあ} もぐら
- 「心に残るモンゴルの旅」 久保孝雄
- 「すいません…僕、ゲイです」 増田たかひろ
- 「邂逅」 中他見男
- 「見上げる空は……」 猫丸
- 「父の唯一の台所仕事 それはラーメンをつくること」 作田典子
- 「好きになれない言葉」 小林理樹
- 「季節とともに」 伊藤 久
- 「やれば出来る！」 山崎利恵子
- 「記憶のすき間に残るもの」 せいしゅうゆき

- 「さようなら子宮さん」 こばやしるみ
- 「水曜日に泳ぐ」 今井 夕
- 「命の限りを尽くす」 山ノ内京子
- 「天国との契り」 田中真子
- 「出会いの中で」 糸満久美子
- 「青白い手」 北上 実
- 「風のように」 岡崎こま子
- 「おもかる様」 華井ゆりな
- 「長火鉢」 久遠時 周

社会批評賞入選

- 「大学院重点化という愚策」 伊良林正哉
- 「白書の外来語」 清野定男
- 「失われたコミュニケーション」 白土浩三
- 「もうひとつの大気汚染」 秋谷正夫
- 「どうでもいいという切なさ」 桜井ゆた香
- 「教育——その格差に思うこと」 廣末 昭一

やがて、母のために家を借り、母の「妄想」の相手をすることになるのだが、「私を捨てた人を何故、私は捨てられないのだろうか」という思いにさいなまれる。「睡眠薬と安定剤のばら撒かれた」家に住む母は、すでに母と娘という認識も危うく、感情の結ばない存在であり、したがって、和解もあり得ない。しかし、それゆえに娘は、そこに、母と娘の無垢な世界を築く余地を見出していく。

この作品は、精神を病んだ母も、その妄想も、また、共同の生活体験も淡い母を、母と受け止める娘のこころも、謎ではなく、生きるということを探る対象としていて、読みごたえがある。

優秀賞の寒川靖子「亀を焼く」は、戦争中「みんな、おながが空いていた」という子供達が、冬眠中の「石亀」を見つけ、枯れ草を集め、焼いて、食おうとする話である。火を付けるのにも「マッチを持つことは物不足の折から火の用心をきつくりしましめられていたので、持っているはずがない。石と石を打ち合わせたか。木をこすったか」と、回想する。

やがて、「火は燃え」「異様な匂いが漂い始め」と、「子供達はしゃがみ込んで」「黙ったまま、目は火の一点を見つめていた」という。火が落ちると、一番年上の子供が「棒切れでかさかさ焼けた草をひっかきまわした」。亀は「半分死んで半分生きて」いて、「亀をひっくり返そうと」す

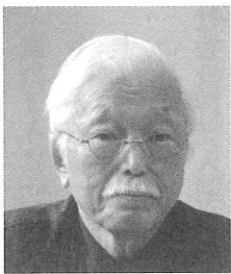
持ちをしているが、否定一辺倒の言辞ではない。解くに解けない肉親のしがらみを諦念交じりに表した、極めてデリケートなことばだろう。ここから諦念の色が薄まれば「血は水よりも濃い」となるのかも知れない。今年も親子関係を軸に家族をテーマとする作品が目についた。たとえば「千個のマイルドセブン」(北三平)、「見上げる空は……」(猫丸)、「一本のレールの上で」(林原ちか子)などである。ここにはほのほのだけでもなければ、一家離散でもない微妙なあわいの家族関係、また、その心情が多く描かれている。やはり「血は水よりも濃い」「汚い」のだなと感じざるを得なかった。

中でも当選作となった「さがしもの」(金子みのり)や「片目」(武藤蓑子)は印象的だった。前者は小説にでもなりそうな長い間の母との確執が丁寧に描かれる。棄てられ、棄てたいと思った母子関係がそうたやすくは解けるものではないと気付いてゆく過程は「さがしもの」のタイトルにマッチしている。後者では父親の死によって現世的な親子の関係は終結する。ただ父親の死の際まで持ち越されるほどの確執(「攀じくれた父娘の関係」)がどのように胚胎し育ってきてしまったのかについてはまわりくどい割に説得力に欠ける。父親の片目への恐怖感がグロテスクなまでに執拗に描かれているだけに惜しまれる。

「天からの闖入者」ひとを支えるもの」(多胡幹)は善く

ると「甲羅が半分はずれて、その下からどす黒い肉とこつた赤いものがぞいた」とも報告される。

この作品の読みどころは、亀を囲んで焼く子供達という、特異で不気味な風景であることを超えて、いつまでも失われないうる記憶というものの性質についてである。粉飾もされず、変形もされず、見たものが見たままに、臭いまでもが、今日の出来事になっている。一匹の「半分死んで半分生きて」いる亀の甲羅の上で、戦争の時代が、また、長い歳月が、たちまちに過ぎていってしまったという思いにさせられる。



ふくおか てつし

1948 山梨県甲府市生まれ
留都大学文学部講師
評伝深沢七郎(山梨大学文学部)著
高健賞(山梨大学文学部)受賞
山梨文学会(山梨大学文学部)会員

「異物(違和感)」の摘出

福岡哲司

「血は汚い」という巷間の俗言がある。これは否定的な面

も悪しくも結構の目立つ作品である。偶然迷い込んだ猫が家族とりわけ病身の老母にとつて何にも替え難いセラピーとなったことには共感ができる。「まつとし聞かば今かへりこむ」が迷い猫の帰宅を願う呪いであることは、内田百閒「のらや」や長田弘「ねこに未来はない」を持ち出すまでもなくよく知られている。作品の終末をこの歌に持つてくるのは洒落たようだが少しばかりわざとらしい。

ほかに私の印象的だった作品を挙げる。

「ぬかをすくう」(よしずみ敬子)の後半部の精米部屋の描写には魅力を感じた。ヨーロッパのどこかの古い教会の奥まったところを連想する箇所も共感できた。後半部がいだけに残念なのは、塩田まで坂を駆け下りて行く前半の場面とこの後半部とが二分していることだ。そのためテーマがぼやけ、単なる回想になってしまい、終末部の「時」への考察が付け足しに響く。

「自爆」(木戸竜之介)は戦争末期の多摩川河川敷にあったグライダークラブの話である。新制高校になってからも「滑空部」が存続している学校があって、戦時中の名残のような気がしていたが、このような実践的な(?)グライダーの訓練があったとは評者も知らなかった。ましてや陸軍では民間への被害を食い留めるために「自爆」する厳命も下っていたとは。目の前でグライダーの墜落を目の当たりにしたことのある自分には痛烈な感があった。

「ある青年の死」(藤田陽子)も長崎に於ける二次放射能の被爆による一人の青年の死を報告してくれている。表現も抑制されていて、しかも、丹念な描写である。何千人もいたであろうこうした犠牲者のことはなんべんでも語り継がねばならないと思う。

現代の世相を映した作品にも心が残った。期間社員の日々と思いを描いた「昨日 今日 そして明日」(島人志)は、二〇〇八年六月の秋葉原の事件から起筆しているからばかりでなく、働き盛りが働かせ盛りになっている日本の悲惨な現況を垣間見させてくれた。上手とは言いがたい表現ではあっても、現在の雇用状況が単に経済や生活の問題ばかりでなく、世代の心情まで蝕んでいることを存分に感じさせてくれた。

また、この作品と偶然同い年の筆者なのが「どうでも良いという切なさ」(桜井ゆた香)だ。筆者はふとした興味から自殺志願者の掲示板サイトを検索し、目が離せなくなってしまう。刻々と書き込まれてゆく自殺志願者からの現実味のない文字たち。そこに後から後から登場しては退場してゆく「生欲」を喪失した者たち。核エネルギーにも似て人間のコントロール不能なインターネットというメディアの中で、真に病んでいるのは誰なのかと考えさせられる。

自分の中にある異物(違和感)を摘出するために、エッセイという切なさ(桜井ゆた香)だ。筆者はふとした興味から自殺志願者の掲示板サイトを検索し、目が離せなくなってしまう。刻々と書き込まれてゆく自殺志願者からの現実味のない文字たち。そこに後から後から登場しては退場してゆく「生欲」を喪失した者たち。核エネルギーにも似て人間のコントロール不能なインターネットというメディアの中で、真に病んでいるのは誰なのかと考えさせられる。

「ナタリーの夏」(八木睦美)、「銃後の社会」(梨場貞人)、「アニタ」(渡辺裕香子)、「蜩」(池山弘徳)、「ツバメ」(山口順子)などはどれも優秀賞レベルの作品だと思ったが、今回は涙を飲んでもらった。例年より倍多い優秀賞一〇篇は、この事情を背景にしているが、それでも汲みきれなかった。優秀な作品が多いときは、受賞者もなるべく多く推しているが、それでも受け止め切れなかったのが今回の選考である。

当選作「天からの闖入者―ひとを支えるもの―」(多胡幹)は、医師から見放された老母が、子猫の必死で生きようとする力に、生命力をもらう話である。命どうしとしていたわり合い、生き合うそこに、新たな力が互いに湧いてくる、命の真の一面を見せてくれるところにひととかわ輝きがあった。同じく当選作「さがしもの」(金子みのり)は、自分たちを捨てた母親の零落を引き受け、許して共に生きる姿勢に、温かみと救いを感じられた。逆にもう一つの当選作「片目」(武藤蓑子)は、父親との確執を最後まで続け、死の向こうにまで飛び越える血の運命が迫力に満ちて描かれていた。愛と憎しみは共存する一つの力であることがこれら当選作の底を流れている。

例年動物を描いたものに秀作が多いが、今年は特にそれが多かった印象がある。「蜩」「ツバメ」は胸に残った。また動物だけでなく樹木に共生の思いが宿ることを教えてく

セイというスタイルを用いて表現することも大事な仕事だと思つづくと思う。それだから、一次、二次の選考を経れば、内容的には本当は優秀付けがたいのである。



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ 像群受賞
79 「流論の島」で読売
新人長編小説賞
98 「緑の手紙」でNTT
新聞・NTT主催第1回
インターネット文芸
センターネット文芸
新人賞最優秀賞
2002 「鉄の光」で友
文学賞賞

多い優秀作―五年の重み

五十嵐 勉

第五回「文芸思潮」エッセイ賞は今年もまた応募数が増えて七〇〇人を突破した。内容も充実していて、日本の現代の様相が反映されていた。レベルも上がった。私の場合、10点満点で9.5以上は優秀賞と評価しているが、9.5以上は実に二七篇あった。「砂漠」(六藍光洋)、「東京離愁」(矢尾博子)、「在日」の友、抗議の焼身(西島雅博)、「千個のマイルドセブン」(北三平)、「HUG」(山手春奈)、

れた作品も少なくない。優秀賞の「ピロ物語」(田中ひかり)、「サクラの木」(萩原ルイ子)の他にも愛着深い、木という命との対話があった。

高齢の筆者による戦争中の話も佳いものが見られ、「亀を焼く―戦争のはざままで―」(寒川靖子)、「ある青年の死」(藤田陽子)、「自爆」(木戸竜之介)、「広島菜」(安芸遙)など戦争の時代をよく切り取っている。逆に若い世代は、その広い視野と行動力で、グローバルな体験を鮮やかに訴えている。優秀賞「セリエAがくれたもの」(田村マイ子)、「ラマダン」(益田勇氣)、「奨励賞」ナタリーの夏(八木睦美)などは、世界に向かい合うストレートな筆致がすがすがしい。未来を感じた。

今回二つ気になった作品群があった。一つは技術立国日本に関する警告である。社会批評賞の「迷路をさまよう、我が国のロボット開発」(田中堅)、入選の「大学院重点化という愚策」(伊良林正哉)は、その点を鋭く突いていた。もう一つは派遣社員に関するもので、昨今の若者の労働事情をよく反映している。秋葉原の無差別殺傷事件と不安定な雇用とを重ねて書いているものが二篇あり、そのうちの一つ「昨日 今日 そして明日」(島人志)が社会批評賞となったが、奨励賞の「小規模就活」(樋口和美)を含めて今回この領域のものは特に多く、予選を含めて二十篇近くの作品があった。一度特集をしてみたい。

第6回 文芸思潮エッセイ賞 作品集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

主旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格とする）

応募資格●不問

応募規定●400字詰原稿用紙5～10枚（原稿用紙使用の場合は必ずA4原稿用紙を使用のこと／B4は失格）。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。

別紙に①応募部門（第6回「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記のこと）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日⑤〒（必ず郵便番号を明記のこと）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらが厳守されていないものは失格となる。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が好ましい）。★**応募審査料 1000円**を郵便為替などで同封のこと。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●エッセイ賞■賞状・トロフィー・賞金10万円

優秀作■賞状・賞メダル・賞金3万円

奨励賞■賞状・賞メダル 入選■賞状・記念品 団体賞●10篇以上（新設）

選考委員●三神弘・福岡哲司・水木亮・五十嵐勉

締切●2010年4月30日（当日消印有効）

発表●予選通過者発表は2010年7月末発売の「文芸思潮」ウェブ36号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終発表・受賞作は2010年9月末発売の「文芸思潮」37号（秋号）に発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●アジア文化社「文芸思潮」

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。

「砂漠」は日本のような多湿の温帯モンスーンとは対極にある風土をしっかりと見つけ洞察深くそこに潜む哲学を抽出している点で、高く評価した。これまでこのように砂漠の一面を論理として見せてくれた文章はお目にかからなかった。体験に裏付けられた優れた論理と思う。眼が洗われるものがあった。

最終選考には残らなかった作品の中にも、心に残る世界、胸を打つ作品が多かった。このような状態で、このような状況で、人はなおよく生き続け、希望を持つものだと、勇気をもたらした作品も少なくない。書く意味をあらためて教えてもらった作品もある。賞に漏れても、書くというそのことを大事にしてもらいたい。

ペンネームが安易だと、作品を損ねる。姿勢がバラしてしまふような筆名は、避けるべきだろう。

五回を重ねることのできたこの賞に、年輪の重みが一つ加わった気がする。寄せられた日本や海外からの誠実な思いが重ねられ、大きな蓄積がなされた。それぞれの思いや考えを共有する場として、今後も続いていくことを願っている。



選考会風景

天からの闖入者

ちんにゆうしや

——ひとを支えるもの——

多胡 幹

医者は、レントゲン写真に写る背骨の部位を指差しながら、「第十一・十二胸椎の間が不自然にくっついているように見えるでしょう。それに頸椎から腰椎に至るまでほとんど全ての骨が透き通っているように見えますか。特に第二腰椎は半分潰れてなくなっていますね。これは骨粗しょう症といって、高齢化とカルシウム不足から骨がすかすかになり、一部で脊椎圧迫骨折を起こしている状態なんです。これでは人間を支えることはできませんね。立って歩けるようになるのは難しいでしょう。手の施しようもないし、年齢的にももう治る見込みはないですね」と、母を前にして表情も変えずに淡々と説明した。

母を家に連れ帰ってふとんに寝かせると、それまでこら

えてきたのだろう、母の嗚咽が布団の中から漏れてくる。俺はたまらなくなつて玄関を飛び出した。悲しみと怒りが同時に募ってくる。このあたりでは一番大きな総合病院の整形外科の医師が、人の希望を奪うような言葉を、本人を目の前にしていつも簡単に宣告しているのか。どこにもぶつけようもない怒りと母の胸中を察し、顔をくしゃくしゃにして込み上げてくる涙をこらえる俺の面構えを誰にも見られなくなかった。

遡ること数ヶ月、父が経営の一翼を担い長兄も勤めていた会社が運転資金に行き詰まり、負債を工面するため、長年暮らした家を手放さなければならなくなつた。それまで互いに和氣藹々と隣どうしで暮らしてきた大家との借地権

に関わる交渉など、辛く悲しい役割を、鬼気迫る形相で演じ切った母のお陰で、何とか苦境を切り抜け、新しい土地で暮らすことになったところだった。

母が四十のときに生まれた末っ子の俺がようやく就職したので、六十五歳になる母は、これから新天地でやつと自分の人生を生きようとしていた矢先に、腰の痛みから歩けなくなり寝たきりになってしまったのだ。回復の望みのないままで見知らぬ土地へ引越さねばならない無念の思いと心細さは、寝たきりの日々を重ねるごとに目に見えて増していくのが感じられ、家の中は笑いというものが消えてしまったかのように静まりかえっている。

ゴソツゴソツゴソツ。俺の寝ているちょうど真上で物音がする。ネズミかなつと思っていると、ピーピーと何とも妙ちきりんな鳴き声が聞こえる。どうも二、三匹はいそがうだ。外に気配を感じて庭を見ると、柿の木の枝を伝って大きな野良猫が屋根に飛び移るのが目に入った。すぐに姿を消してしまつたが、ほどなく真上から聞こえていた鳴き声が止み、動き回る音だけがする。どうも野良猫が天井裏で子を産み育て始めたらしい。

数日後、一匹だけ残してあとは親猫がどこかへ連れて行つた。しかしどうしたことか、残りの一匹はそのまま、連れにくる気配もない。しかもこいつは、一日中、俺の部屋の真上でやかましく鳴き、動き回っている。うるさくて

夜も寝れない。それにこんなところで死なれたらたまったものではない。生まれたときから住み慣れているこのボロ屋とも、あと数ヶ月でお別れなので、いっそのこと天井をくりぬいて、この哀れな生きものを助けてやることにした。天井裏から引つ張り出してきた生きものは、俺の手のひらにのるほどの小さな白い動物で、猫というよりネズミに近い。やかましく鳴き続けているが、牛乳を皿に入れて傍に置いて口をつけることさえしない。とりあえずこいつを段ボール箱に入れて寝たきりの母の枕元に持つて行つた。母は、痛みで自由が利かない背中と腰を少しづつ動かしながら、スポイトを使ってミルクを口の中に流し込んだ。

すると、この小さな生きものは今まで見向きもしなかった牛乳を勢いよく飲み込んだのだ。こうして、半ば生きる意欲を失いかけていた老母と親に捨てられても懸命に生きようとする子猫との奇妙な生活が始まつた。

段ボールの中からひっきりなしに嗚いてミルクを要求する子猫に、痛みをこらえながら寝返りをうち懸命に体を起こして、母はスポイトでミルクを与え続ける。他人が見たら、極めて奇怪な光景に映つたに違いない。これまで家中を覆っていた重苦しい静寂を、子猫のやかましい鳴き声が突き破り、俺の気のせいかな、母の顔色にもいくら赤みが差し生気が戻ってきている。

やがて、不思議な、だがほんとうにうれしい出来事が起

こる。子猫の生育に夢中になっていくうちに、母がいつのまにか子猫を抱いて立って歩いていったのだ。俺は奇跡など信じる者ではないが、医師でさえ見放したのに、こんな小さな生きものが、母の内面に眠っている自己回復力を引き出すことができようとは、このときばかりは、子猫が神様の遣わされた天使ではないかと疑ったほどだ。

ある朝、外でやかましく猫が鳴いている。どうも親猫が子猫を連れにきたようだ。折りしも、子猫は段ボールをよじ登れるまでになっていたのも、もしや親猫が引き取りに来るのではと、子猫を入れた箱を、離れの三畳間に置いていた。半開きにしておいた部屋のドアをそっと開けてみると、驚いたことに、部屋の中は散らかり放題で、しかも子猫が四匹、じゃれあったり駆け回ったりして遊んでいる。久しぶりに兄弟たちが全員そろって親睦を深めていたらしい。親猫の鳴き声に気付いて、子猫たちは次々と縁側を飛び降り、親猫の元へ走っていった。最後に残った例の子猫は、縁側の縁に立ってしきりに母のいる部屋の方を見ている。飛び降りるべきか否か考えあぐねている様子だ。そのうちに親猫と三匹の子猫たちはいずこへともなく去っていった。一瞬の逡巡がその運命をかえてしまうということは、人間にもよくあることだが、こいつの場合もまさにそのとおりで、二度と再び兄弟たちと会うこともなく、人間界の住人いや住猫として生きるようになったのである。

がわりにたたき始めていた。チビは喉を鳴らし猫特有の喜びの表現をしている。音楽が心地よいか痒い背中をたたかれて気持ちがいいのか定かではない。曲が終わると、俺から離れ手足を器用に使って体中を掻いたり舐めたりし始めた。釣られて俺も痒くなり、もう一度風呂場へ急がねばならなかった。

ようやく冬も終わりを告げるころ、チビの姿が見えなくなった。母は、チビの写真を片手に消息を尋ねて近所を探し歩いたが誰も知るものはなかった。野良猫一匹のために足腰の悪い母がどんなに歩いたことだろう。だが、足は浮腫み、写真は日に焼け掠れていく。

七ヶ月が過ぎ、窓に貼られた、母の祈りの言葉、「立ち別れいなばの山の峰におふる」も、すっかり色あせてきていた。これは在原行平の和歌の上の句で、チビが戻ってきたら、これに下の句を続けることになっていて、上の句を掲げることで求めるものが帰ってくるという古い言い伝えに基づくものだ。諦めて忘れ去りかけていたある日、「塀の上で動けなくなっている白い猫がいる」と、近所の人から連絡が入る。

母は足を引きずりながらも出かけていき、やがて一匹の猫を抱いて連れ帰ってきた。

尻尾は無残に切りとられ、瞳はやや緑がかって疑い深く周りを見回し、疲弊しきって、帰る家も忘れてしまう

母はこの白い子猫に「チビ」という名をつけた。チビは真白でふさふさした毛をなびかせ、長くて立派な尻尾を秋田犬のようにクルッと上に丸めて歩き、目はブルーの澄んだ瞳だが、目元が涼しいというよりは優しさに満ち、人懐っこく寄り添う。何ものをも疑わず恐れない純朴さがひと目で伝わってくる、猫というよりハイハイする赤ちゃんを連想させる。

間もなく我が家は世田谷から坂道の多い横浜の外れに移った。母にとっては生活の一部に坂の上り下りが入り、飼い主よりも土地と家になつく習性をもつ動物にとっては全く新しい環境に慣れなければならなかった。

チビは親猫が一匹だけ置き去りにした理由がよくわかるほど体が弱く始終病気にかかった。そのたびにもう助からないと思ったが、死を拒もうとする力強い生命力と母の諦めない看護によって危機をまぬがれた。

チビは、母に守られつつも彼独特のやり方で住人一人一人の琴線に触れていく。

こいつは風呂あがりの俺のひざに乗ってきて腕をいたるところ引っつき、寝巻きに体毛をたくさんつけた。少し痒いのは蚤でも移ったからかも知れない。掛けていたレコードへ注意が向き始めると、こいつもひざの上で寝そべり音楽に耳を傾ける。初め気になった搔痒も曲の進行と共にどこかへ吹き飛んでしまう。半ば我を忘れチビの背中を鍵盤ほどの何かがあったことを想像させるが、チビに相違なかった。一人と一匹は互いに支えあっていたに違いない。用意した座布団の上に寝かせても、すぐに母のひざの上に飛び移り動こうとしない。日だまりの中、長い間ひざの上で眠っていた。何と安らかな深い眠りだろう。母の紅潮した笑顔も生き別れになっていた子に巡り合った実の母のようだ。こうしてチビは母が亡くなるまで傍から離れることなくずっと連れ添うことになったのである。

五年後、母は天寿を全うした。霊柩車が我が家を離れるとき、塀の上からチビがこちらを見つめている。遠吠えのように大きく二度鳴くのが見て取れた。茶毘に付されるとき、火葬場の煙突に立ち昇る一瞬の煙に手を合わせ冥福を祈った。

「ほんのわずかし煙がでなかったね」と、誰かが言うのが耳に残った。お骨を抱えて帰ってくると家の窓に母の筆跡がまだかすかに残っていた。

「まつとし聞かば今かへりこむ」

あれから、はや三十年の月日が経とうとしている。



多胡 幹

たご かん

1950 東京生まれ
75 東北大学理学部天文及び地球物理学科第一卒業
同年、航空会社入社
各地空港で勤務する他、地上運航従事者及びパイロットの教育訓練に携わる。

四十代半ばから五十前後の時期に集中的に接した絵画や彫刻、仏像や古寺巡り、音楽、読書等を通じて人や物の見方が少しずつ変化していくのに気付き、芸術に深く関心を抱くようになる。文章の書き方から学び始め二年ほど前からエッセイや小説らしきものを書くようになり、悪戦苦闘し始めている。

1987より千葉県浦安市在住

受賞の言葉

多胡 幹

「携帯が鳴っていたみたいよ」との妻からの一言に、風呂上りの汗を拭きながら見覚えのない番号の留守電を聞いて思わず緊張してしまいました。拙い文章がエッセイ賞に当選したとのこと、驚きと恥ずかしさが複雑に交錯して、い

つも希望を失わず気丈な母が一時見せた失意の呻きに、救いの手が天から差し伸べられたような経験を語ったのがこの作品です。三十年近くも経つと、強く印象付けられた事象以外は時系列や思い出そのものがおぼろげになり、自ら経験した事実だったのか父から聞いた話だったのか判然としない部分もありました。若いころは母への思いが強く、歳をとるにつれ父の面影が勢いを増してきましたが、本作の中核をなす出来事以降、母は六十八歳から享年七十歳で父に看取られるまで脳血栓で倒れ寝たきりとなりました。ま

た父は文章にはほとんど現れてきませんが、猫のチビの面倒を看、チビの死に際しても供養をしたようです。チビはきつと父とも独特の仕方では繋がっていたに違いありません。母は優しくて我慢強く家族から慕われ続けたのに対し、父は病弱で優柔不断、貧しくても酒とたばこは切らさず、母に苦勞をかけ続け、四人の子供たちからも反発を買って、生活全般に頼りなかつた印象があります。そんな父に信頼の眼を向けた母の最期を、父が自宅で看取るので、夫の仲、いや人間というのとはわかないものです。父が脚本を書いているときにのみ見せた凛々しい顔つきを思いだし、彼が仕事上使っていた「多胡」という旧姓を私のペンネームとさせてもらいました。

物事に対し若いころとは少し違った見方もできるような歳になつてきたのを機に、これからも自分の思いを文章にぶつけることができるよう努力を惜しまず書いてみたいと思つていきます。ありがとうございます。

第5回

文芸思潮

エッセイ賞

当選作

Essay

さがしもの

金子みのり

「金魚がいなくなったのよ」
呂律の回らない、妙に甘ったれた声で母が電話を掛けて来た。

(まただ) 私は、心の中で深いため息をつく。

一年前、「夜中にネズミが食パンを齧っている」と言われた時は、部屋に行ってみると明らかに人の歯型に食いちぎられたパンが、睡眠薬と安定剤のばら撒かれたテーブルの上にそのまま置かれていた。(お前が食べたんだろ)と内心で思いつつ、「お母さん。睡眠薬飲んで寝て無意識に、お腹がすいて食べちゃったんだよ、きつと。ネズミが食べ散らかしたらもっと、パン屑がいっぱい落ちているはずだよ」と、実際にはネズミの食べた後など見たこともないが断定的に論ず。そうしないと、彼女の妄想は広がるばかり

なのだ。

四年前、「鍵を開けて誰かが入っているようだ」と初めて言われた時は、まがい物のブランドバッグと小銭が盗まれたと言っているので、私も前の住人だろうか、そんなこともあるのか、と、その気になつて鍵屋を呼んで、新しい鍵に変えてもらった。ところがその後すぐに、「帰ったら、テレビがついていた」「閉めて出かけたのにベランダの窓が開いていた」などと言い出し、しまいには「鍵屋が入ったんじゃないかしら」と言い出した。あの時は、鍵屋を変えて、二度鍵を変えることで納得させたが……。

「今、見に行くから」と告げて、私は母の家へと向かった。自殺未遂をして、私のところへ来ることになった五年前はもっとおかしかった。私は彼女の病状を見ながら、安

定剤と睡眠薬の飲む量を徹底して減らさせることを心掛けた。側で見ていると、鬱という病気に逃げている気がしてならなかった。調子が悪いと言えば医者には、薬をくれる。母はそれを十年間飲み続けていたのだ。抗生剤を、三日飲めば大体の風邪は治る。歯痛は痛み止めを飲めばその場で痛みが取れる。母の鬱は、十年薬を飲み続けても治らない。彼女のそれは、薬のみで治るものではないと私は思った。鬱という病には、医師の処方箋とは別に、心への薬も投与されなければならない。

小学三年生の春に蒸発した母と、数年後に再会した時、私は中学二年生になっていた。八歳年上の姉と一緒に、駅前の喫茶店へ行った。待ち合わせ場所に現れた母は、濃紺のワンピースを着て、茶色く染めた髪を巻いていた。思い出に残る、エプロン姿で台所に立つ母の姿とは違って随分と若返って見えた。「元氣？」そういつて、私達の返事を待たずに細い煙草に火を点けた。三人で他愛もない近況報告をしたが、私達と母の間の年月と溝は、喫茶店での三十分の会話で埋まるものではなかった。その時母には、お付き合ひしている人がいるらしかった。その人のことをとても好きなのだと言っていた。それを聞いた私は、顔が赤くなったのを気付かれないように下を向いてクリームソーダを啜った。クリームソーダを一気に飲み干して私は思った。

出会い、お付き合ひしていく中でも、常に実母の存在は私の中にあり、私を苦しめた。

許してやろう。そう思うことが度々あった。でも何を？ 彼女は私の意見など、感情など何も求めてはいない。彼女の存在を否定できない感情が私を苦しめていた。私を認めないものを何故否定できないのだろう。私を捨てた人を何故、私は捨てられないのだろう。

三十歳になった頃、母から連絡が入った。お金を貸して欲しいとのことだった。姉に断られて、連絡先を聞きつけ、私のところに回ってきた話だった。

私の住んでいる街の駅を指定し、待ち合わせをした。母の住む街からは、電車を乗り継いで二時間程かかるが、母は喜んで領いた。駅構内のパン屋のカウンター席に母はピン止めで留めていた。私を見つけて、にやっと笑う口元の歯は殆どが抜けていて、薄汚れた男物のトレーナーを着ていた。頬は肉が削げ落ちていた。母は、まだ六十手前の筈だが、歳よりも随分と老け込んで、老婆に見えた。

「お久しぶりです。元氣だった？」

母は、不気味にキョロキョロと動く黒目で私を見てそう言った。母の前には、水と煙草が置かれているだけだった。

「何か飲む？」

(赤くなった顔を見られないでよかった)と。前にもこんなことがあった。小学二年、父と別居した母に連れられてアパートの一室に住んでいた時だった。母は、キャバレーの仕事に行くために鏡台の前で化粧をしていた。姉はいつも友達の家遊びに行き、なかなか帰ってこなかった。私は、小学校で辞書の引き方を教えてもらったばかりで、辞書を引くという行為が嬉しくて、母に「何か調べて欲しい言葉を言って」と告げた。母は口紅を引きながら「離婚っていう字を調べて」と言った。

鏡越しに母を見ていた私の顔は見るうちに真っ赤になった。母は気付かずに、頬紅をつけ始めていた。私は、母と目が合わない様、すぐに辞書を開いて「離婚」という字を引き、何事もなかったように、書かれた言葉をすらすらと読み、母に意味を教えてあげた。

私達がジュースを飲み終えたところで、再会の時間は終わった。母は、喫茶店を出たところで、姉と私に三千円ずつ渡すと、元氣でねと言って手を振って別れた。

母とはそれきり、会わなかった。父は再婚し、新しい母の元で私は大人になった。けれど社会に出て生きて行くほどに、私の脳裏にはいつも実母がちらついていた。人間として生きていく上での、挫折、喜び、悲しみを経験する度に、彼女の影が私の中をどろどろにする。様々な人たちと

私がそう言うとき、

「あ、じゃあアイスコーヒート、何も食べてないから何か食べていい？」

遠慮もなしにそう言うとき、灰皿の中の吸殻を上手に伸ばし、火を点けた。私から尋ねることは、何もなかった。母は、財布を落としてしまったのだと言って、私から一万円を受けとると、いそいそと帰っていった。

そんなことが、数回続いたときに私は返済を求めた。母は、しどろもどろにその場を取り繕って、私の手元には一向にお金は戻らなかった。そして、クリスマスの日の電話で幾らでもいいから貸してくれと言われた私は、母へのクリスマスプレゼントとして、何も言わずに電話を切った。

それから一カ月後に母が手首を切ったのだった。傷は深く、全治数ヶ月。身請け人になって欲しいとの病院からの連絡で母の自殺未遂を知ったとき、私は何も感じなかった。会いたくなかった。私はそんな電話はなかったことにして、日常を送っていた。数日が経ったとき、母から電話が掛かってきた。迎えに来て欲しいとのことだった。私は仕事のせいにして返事を先延ばしにし、姉に相談すると、姉は病院からの電話にも、「今は他人です」と答え、受け入れを拒否したとのことだった。「あんたもそう言いなさい。あんな人、施設送りになればいいのよ」と吐き捨てるように言った。

母の家に着き、金魚の入られていたラーメンどんぶりを覗いたが、やはり金魚はいなかった。多分、勢よく飛び跳ねて、水から飛び出して台所に流れてしまったのだろう。母は、「最近知り合った友達に、金魚を飼い始めたから私の金魚を盗んで行ったのではないかしら」と、真顔で話している。私は、ここに住み始めてからの一件を思い出させるために、一通り説明した。そして、妄想に囚われるような何か悩みがあるのではないか、お金がないのかを尋ねると、

「はいはい。わかりました。今日は考え事をします」と鬱に拍車をかける行動に出ようとしたので、近くの公園へ散歩に行こうと誘ったが、母の心は硬く、部屋にしていると言い張った。

この人を病院から受け入れた時、私は何時でも捨ててやろうと思っていた。今度はあんなのことを私が捨ててやると。そして母を、スープの冷めぬ距離に間借りさせ五年が経った今、もしかしたら私は、こうなることを望んでいたのではないだろうかと思うことがある。私はただ、この人に求めてもらいたかったのかもしれない。

数年の間に、何度となく喧嘩をし、彼女を怒鳴りつけることなどは日常茶飯事のこととなった。それでも母の日にささやかなプレゼントを贈ったり、近くの温泉に旅行に連

れ立ったりと、日々を送るうちに、私はこの人の母になつてやろうと思っているのかもしれないと、少しだけ思った。けれどそう思った自分が、少し悔しい気持ちになつてしまつたので、その考えを追求することは止めた。

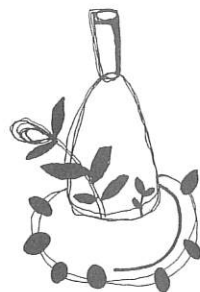
母と別れて家路を歩いていた私は、金魚のいなくなったラーメンどんぶりを訝しげに眺めて、ひとり妄想の海を泳ぎ、首を傾^{かし}げている母を思い浮かべ小さく笑った。



金子みのり

かねこ みのり

1971 東京生まれ
会社事務、ショップ店長、接客業などを経て、現在事務員として就業
仕事の傍ら心の膿を吐き出すように、現在執筆邁進中



受賞の言葉

金子みのり

一つの出来事は、三角錐のように見る角度によって形を変える。その只中にいる人物それぞれに様々な思いがあると知っている。そしてその人達のことを思うと私の手は止まってしまう。なので、今回は本当に自分勝手に私目線で、書かせてもらった。そして、書き終えて読み返したとき、私は泣いた。何度も読み返し何度も泣いた。

私は知らなかったのだ。何故小さな私は、顔を真っ赤にしていたのか。どうして、真っ赤な顔を見られたくなかったのか。私はあの時ただ泣きたかったのだ。ただそれだけだった。そのことだけが、私の心の成長を止めさせていたのだと知った時、書いてよかったと素直に思った。

我が息子は、今年で三歳になる。生まれた時の戸惑いは今でも覚えている。たとえるなら、お見合いして、その日に結婚式を挙げ、人生を共に生きると誓うような感じ。そして、戸惑いながらも(貴方ですか。私のお腹にいたのは。これから私が命をかけて育てていくのは)と妙に冷静に思

う私もいた。よく、育児雑誌に書かれているような、見た瞬間から愛しいと思うというような感情は全く浮かばず、決意だけが心に宿った。私は「よろしくね」と言つて握手をした。どんなことがあるうとも、貴方を決して離さないという私の覚悟の言葉だ。

子供と共に生きていく中で、私は初めて、自身と向き合いたしたように思う。誰かを守って生きるということは、選ぶ道を間違えてはいけないということであり、それには自分自身を先ず知らなければならぬということだと無意識に思ったのだろう。まだまだ、私の中に溢れ出した言葉達は飽和状態で、外に出ることを待ち望んでいる。それらを書き終えた時、私は、どんな私を知るのだろう。

最後に、放流した稚魚の様な私の文章をすくい上げ、抱きしめて下さった選考委員の皆様と、私の人生に関わるすべての人達に感謝したいと思います。ありがとうございます。

片目

武藤蓑子

老人施設に十年近くいた父の容態が悪くなり、奥多摩のある病院に移されたという知らせを受けた。今夜にも危ないということだった。

病院は驚くほど山の中にあつた。私の運転する軽自動車は、狭い土道をデコボコ跳ねながら進んだ。両側から藪がかぶさってきた。木がうつそうとした中に、世から忘れ去られたような寂しい佇まいで病院はあつた。

ナースセンターの隣りの病室に父の名札があつた。覗くと、左右に四人ずつ白いシートに覆われた人たちが寝ていた。もはや呻き声も痛みを訴える声もなく、静かにならんでいる。ここは死に近い人たちの部屋らしかった。そのなかでも最も死に際にいる人が、入口のベッドに移される。ナースの目がいち早く届くからである。

える今この時、父には私に遺すべき憎しみと恨みがある。意識がないように見えるけれど、実は意識を戻して、末期の呼吸に今生の憎しみをかき集めているに違いない。今にも、くわつと目をあけて睨むだろう。その目から強い怒りを発するだろう。私を慄かせずに逝くはずはない。それを必ずや私に遺す。その魂胆を私は知っている。

私はほんの子どもの頃から、父を嫌って親しまなかつた。険しい目つきで睨むか目を伏せるかして父を避けていた。こんな子を、父は苦々しく思ったに違いない。

私は今でもしばしば思い出す。どたとたと転びながら村の道を帰ってくる酔っ払った父の姿や、「人前ですぐに怒り顔をしたり、怒鳴り声を出したりするじゃあねえぞえ」と母に窘められて「うっせえッ」と怒鳴っている父を。思い出せば、またあの嫌な気持ちがそっくり戻ってくる。子どものくせに父を軽蔑していたのだった。

病弱な母が寝込んでいた枕元で野良仕事を言いつけていた無頓着な父に、私は小さな拳ながら殴りかかった。

また、父は何かあるとすぐに「どうするだ、どうするだ、どうにかしてくりようやあ」と、他の人に訴えて、男のくせに声をあげて泣いた。

大きくなって父と対峙できるようになると私は悪態をついた。「とうさんは、いつも、どうするどうするって、人

父はそこにいた。透明な三角の酸素マスクを付けて、大きく口を開けていた。短い息の音が微かにして、顎が動いている。それ以外はどこも動いているところはなかった。ベッドの脇に下がっているチューブから尿も落ちていない。身体の機能がなくなっていることは私にもわかった。白いシートに包まれた薄い盛り上がり死が支配しようとしていた。

枕元でじつと父を見つめた。

父は老人施設にいた前から、もうずっと眠っている状態になっていたので、危篤といつても、こうして寝ている姿は前と変わりなかった。

しかし、私はおそれつつ見つめた。父がいきなり目を開くのではないかと。

このまま父が逝くことなどあるものか。いよいよ死を迎

の尻をつついて負ぶさってはかりで、よくそれで威張った顔して怒鳴ってられるよね」

「バカヤロウ、狼の子じゃあるめえに、親に食ってかかって、この、人でなしッ」と、父はもう泣き声を出した。

「男のくせにすぐそうやって泣き喚いて、大の男がヒーンヒーンと涙を垂らして泣くなんて。恥ずかしくないのッ」

こんな罵り合いがしょっちゅう起こった。

父にゲロを吐きかけられたり、私が父を罵倒したり、そんな夢を見て、飛び起きて泣くこともしょっちゅうあつた。憎々しい目で睨む父。それを無視し横顔に嫌悪を表す私。

確執は深まるばかりだった。父と顔を合わせるのが嫌で、家の中でも隠れていた。

とりわけこの確執が大きくなったのは、私の結婚だった。田舎の古臭い言い方だけれど、私は総領の跡取り娘として、家を継ぐ義務を小さなときから負わされていた。しかしこんなことは承知できなかった。何としても家を出たかった。「勝手に押し付けて、そんな約束、私はしていない。継ぐような家でもないし」

「それじゃあなんだ、親の老後を看ねえっちゅうだな。親を捨てるっちゅうだな。そんな人の道に外れたこととしていいと思うか」

その時私は黙っていたが、心の中で言い返していた。他

の誰の老後を看るとしても父を看るのは嫌だと。父は顔をしかめて、カッ、カッ、カッと泣いた。その父に、私は胃が硬くなるほど腹が立って、「私は知らない。絶対に家を継がない。結婚して家を出て行く」と言い放った。

「俺のことなんかどうなってもいいっちゅうだな。それじゃあ俺はどうすりゃあいいだ。これじゃあ、まるつきり、心もねえ狼の子じゃねえか」

「ええ、いつそ狼の子のほうがよかつたッ。こんな狼の子捨ててしまつてよ」

私は頑なに拒否し、そして結婚して家を出た。それきり父とは大きな溝を隔てて、母を通じてお互いの様子が入ってくるくらいだった。

母が亡くなるときに「とうさんを頼むわな。お前しか看る者がいないんだから」と言った。私は「かあさん、そういうこと言い遣さないで。かあさんが言い遣したら私は肯かなきゃならないでしょ」と心で言った。だけど私は「うん」と肯かなかつた。

母が死んで間もなく、もともと脳梗塞の気があつた父がたちまち悪くなり、介護が必要になつた。嫌がる父を車に押し込むようにして、無理やり東京へ連れてきた。

それからは毎日喧嘩だった。父の身体は下の世話まで必

る父だ。だが、これが生きている父であるゆえに、死んだ父よりも怖い気がした。とりわけ、右顔の片目が不気味だった。

父の右顔は醜い形相をしている。昔、感電事故に遭い、右顔を中心に負ったひどい火傷で融けてしまったのだ。幾度も整形手術した。おかげでいくらか見た目もよくなったが、しかし、病氣や老化などで身体が衰退するにつれ、また壊れていった。そしていよいよ死が迫ると、そうした整形した部分はどこよりも寿命が短く、崩れて萎んでしまった。

額から右頬骨にかけて陥没しており、そこに縮れた赤黒い皮膚がゴムのような照りをもって張り付いている。その陥没をさらに抉つたような窪みに眼孔があり、眼孔の底に赤い小さな目がある。目蓋が縮れて引き攣れ、開きっぱなしの目。その中に黒い目玉が座っていた。それはまるで、血の滲んだ切り傷の中に黒いゼリーの欠片が詰まっているように見えた。私の目はそれに吸い付けられた。

すると、赤黒い陥没の底から、赤い片目がじわつと私を見た。その中の黒いゲルがにゅると動いた。赤い片目が、怒りを込めて睨んだ。黒いゲルが憎悪の光を放つた。牙を向いていた狼の子を、父は今際の片目で睨んだ。この片目が、この光る黒いゲルが、私への遺産だ。今後これが私に付き纏い、怯えさせ不快にさせるのだろう。

要になつた。しかし故郷へ帰りがる父の思いは募り、怒つたり、焦れたり、泣き口説いたりした。父の気持ちはわかる。

「だけど、とうさん一人で暮らせないんだから、しかたないでしょ」

「俺は一人でできるさッ。お前なんか見て貰わなくて、他にいくらでも見てくれる人がいるわッ。こんなところへ連れてきて、俺を殺す気かッ。おまえの世話になんかならねえ。早く帰せッ」と、父は怒り狂つて紙オムツを投げつけたりした。

やがて、介護面でも、感情面でも、家庭の空気の面でも、いろいろと限界がきて、ついに老人施設の世話になることになつた。

父の怒りがますます大きくなつたのは当然のことだ。私が見舞いに行つても口をきかないし、無視している。だけど車椅子に座っている背中いっぱいに怒りが表れていた。寝たきりになつてからも、チャラッと薄目を開けて睨むだけで、あとはずつと目を閉じてしまい、話しかけても身動きもしない。私は一人で喋り、空しい挨拶をして、すごすご部屋を出てくるのだった。その施設で十年世話になつた。

今父は肉の削げ落ちた土色の顔で、死の寸前にいる。酸素マスクの中の顎が息をしているからには、まだ生きてい

父との確執のおぞましさに身震いしながら、その片目をまじまじと見ていた。

「こつちの目は、開いたままですな」

私はナースに言ってみた。

「ええ、塞いでも閉じないんですよ」

ナースは自分の人差し指で父の片目を押さえ、それが閉じないことを示してみせた。そして、私が父の醜怪な顔を悲しんでいる、と思つたのか、右目の上にガーゼをかけてテープで貼つてくれた。片目が隠された。

「その時にはお知らせしますので、少し息を抜いてもらっては。もしかしてご臨終に立ち会えないとしても、それでよろしければの話ですが」という提案をナースが出してくれたので、そうしてくれるようにと頼み、病院の近くにいることを伝えて外に出た。

私は、病院の周りの林の中を歩いた。

雑木や草木は、晩秋のこの時季の与える光と温もりに従つて、色の限りを尽くしていた。おしなべて赤銅色に輝いて見えながら、多様な色の入り混じつた林は、秋の歌の終章の情を醸している。しかし、その錦繡の間に、私は怖いものを見ていた。林のあちこちにあの片目を見ていた。木々の葉陰から父の片目が睨んでいた。



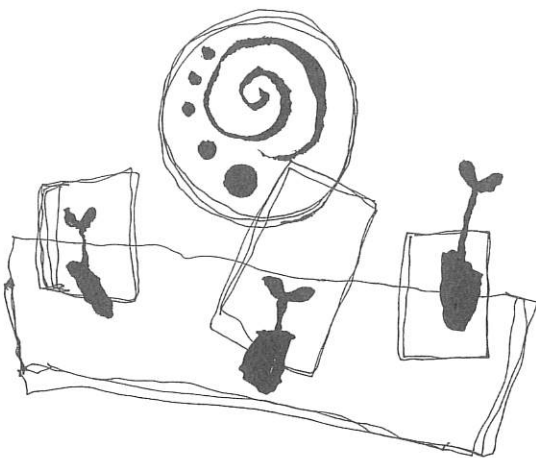
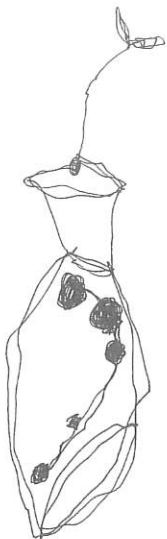
武藤 蓑子

むとうみのこ

長野県茅野市出身

二十代より短歌を始め

1977 角川短歌賞候補

四十代になって、小説、
随筆、詩などつづり始め
る2003 「長野日報社」長野
文学賞随筆入選2006 「長野日報社」長野
文学賞受賞2008 第4回「文芸思潮」
エッセイ賞優秀賞

ついに父が息を引き取った。
ナースから電話が入った時、目の前に白銀の光が差し、
林が透き通ったような気がした。灌木と藪の奥から、梢の
囁きと草の息が微かにしていた。土に帰ろうとする落ち葉
がときおり鳴った。私の内の濃がいつせいに湧き上がり、
耳鳴りがした。下腹にまで深く息を吸い、声に出さず言っ
た。

「とうさんが死んだ。ここにいる私を紅葉の葉陰から片目
で覗みながら、独りで逝った」

そのとき、林の匂いがツンと鼻の奥を抜けて頭に広がっ
た。これは父の野良着の匂いだ、と思った。故郷の村の紅
葉鮮やかな山の田で、稲を刈る父の姿が見えた。「おやつ」
と、自分の心に耳を澄ました。父を可哀想に思った。

酸素マスクが外されていた。ぼかんと開いていた口を閉
じるために、顎から包帯をかけて頭のてっぺんで蝶結びし
てあった。

あの片目はどうなったか、かぶせてあるガーゼを剥がし
てみようと思った。が、ガーゼを剥いだ途端、あの怨恨を
残す赤い片目が、にゆるりと黒いゲルを動かすような気が
して、そっと指を引っ込めた。

「とうさん、これで終りにしようね」

私が入差し指で白いガーゼを蓋をするように押さえたと
き、その奥から私の胸を射抜き、光を投げかけてくるもの
を感じた。この片目はやがて焼かれるあいだもずっと私を
見つめ続けるだろう。燃え盛る火焰に巻かれよじれながら
焼き尽くされてもお私に投げかけられてくる。
それによってしか父娘の情愛をなしえなかった確執とい
う一つの愛憎の形が、外の白銀の光の中に溶けていく気が
した。

受賞の言葉

武藤 蓑子

やはり文章を書くことはたいへんだと思っ
ているきょうこのごろです。

自分の書きたいと思っ
ていることを、心ゆくように書き
表すことは、なかなかできず、常に不完全燃焼の気分です。
たまに「よし、書けた」とまなじりを上げて、い
つもそれは勘違いでありまして、実際は地表を撫ぜたにす
ぎず土壌を丹念に耕してはいなかった、とあとで気付くこ
とになり、未熟さを思い知るのです。

それにしても、こうした文芸思潮への応募は、上達のため
の道であり、力を付けるための厳しい訓練の場であると言
えるのではないのでしょうか。

学んだことを活かして、前回よりは今回、今回よりは次回
と、築き上げていきたいと思っ
ています。

このたびはありがとうございました。引き続き努力して
いこうと、大きな励みを得ることができました。

亀を焼く

——戦争のはざままで——

寒川靖子

乾いた風が吹いていた。

県境に横たわる山脈から吹き降ろして来る風が、時折り粉雪をまじえて身を切るように冷たい。風が通り過ぎるたびに枯草が音を立てた。

墓地の中には私達六人の子供以外に人影はない。男の子三人、女の子三人である。

何でそこにいたのか。どうしてみんながそこへ来ることになったのか。記憶は途切れるが、とにかくそろって頬を紅くして高ぶった眼を光らせていた。

子供達の小さな輪の真ん中には、一匹の亀が置いてあった。仰向けに転がされた亀は、寒空の下で足も頭も引つめたまま、黒い物体のように見える。

子供達の中で一番年かきのNちゃんが、冬眠中の亀を見つけて来たのだ。

「焼いてたべるか」

Nちゃんがいった。

沈黙は短かった。男の子はすぐにいつもより甲高い声ではやしたてた。女の子は少しづつらそうに顔を見合わせた。誰も何もいわなかった。

みんな、おなかが空いていた。

戦争が長びけば長びいた分だけ、たべるものがなくなつてゆく。大人達は一生懸命だがどうしようもない流れに呑み込まれていた。

その流れに添うことが、国民の一人としてよろこびですらあった時代だった。

やがて、子供達は墓地のあそこここから集めて来た枯草を、Nちゃんという通りに亀の上に盛り上げて置いた。亀は見えなくなった。

て鳴っていた。心臓がのどからとび出すかと思った。

誰もが突っ立って動かなかった。

その時、Nちゃんがものもいわずに残り火をたたいて消し始めた。Nちゃんの動作はとてつらそうだった。

この場を思い出すたびに、私は亀のこともさることながら、火の後始末をしていたNちゃんの姿が目につく。恐ろしがって近付こうとしなかった子供達の中でNちゃんだけは違っていた。腕白だったが自分のしたことに責任を持つていたのだと思う。

その夜、私は四十度近い熱を出して父や母を驚かせた。

役所から帰った父は、国防服にゲートル姿で寝ている私の顔をのぞき込むと、「苦しいか?」といった。私はそれに返事もしないでふとんの中へもぐってしまった。母の心配そうな声が聞こえた。

亀を焼いたとはとてもいえなかった。その上たべるつもりだったなど。

そのことがあってから、おなかが空くと亀の様子を思い出して私は気持ちが悪くなったのを覚えている。

亀は石亀という大きな亀だった。それも私自身が小さかったので、ことさら亀が大きく見えたのかも知れない。

遠い日、国民学校と呼ばれていた時代に学んでいた子供達が、山里に刻んだ一つの出来事である。

そして、火がつけられた。その火がどうやって燃え上がったか。マッチを持つことは物資不足の折から火の用心をきつくいましめられていたので、持っているはずがない。石と石を打ち合わせたか。木をこすったか。

火は燃えていた。

その内に異様な匂いが漂い始めた。

亀が焼けているのに違う。私は胸にこみ上げて来るものを覚えて、しゃがみ込んでしまった。今まで見たこともなければ考えたこともない出来事が、目の前でおきている。みんな黙ったまま、眼は火の一点を見つめていた。

そして、ひとこともいわないまま火は落ちた。Nちゃんが棒切れでかさかさに焼けた草をひっかきまわした。

出て来た亀は死んでいなかった。手や足や頭を力の限り伸ばして、くねくねと動いている。半分死んで半分生きていた。私は声をたてずに泣いていた。

恐ろしかった。

Nちゃんは棒切れを持ち直すと、亀をひっくり返そうとした。すると甲羅が半分はずれてその下からどす黒い肉とにごった赤いものがぞいた。

「わっ!」

子供達は遠巻きに散ると、眼をむいた。

もともと丈夫な子でなかった私は、がたがたと震えながら口の中にたまったものをその場に吐いた。胸が音を立て

受賞の言葉

寒川靖子

長びく梅雨に体調を崩し勝ちの日が多かった。むし暑さに疲れ易さも感じていた。

そんな夜に受賞の知らせが届いた。受話器を持ったまま、瞬時本当だろうかと思った。そのせいか、跳び上がるようならぬしさは感じられず、頭の中のどこかがざわめきながら朝を迎えた。信じられない、まだそんな思いがあった。過去を振り返れば必ずそこに戦争がある。文章を書こうとすれば戦争が脳裏をよこぎる。しかし、それを作品に仕上げて評価されることは少ない。

今回受賞の作品も戦時のひとこまを書いたものだ。それだけによるこびは大きい。知ってほしい、解ってほしいあの時代の子供達の日々。忘れない時間はそのまま停まっ

いる。「亀」を焼いたその時の少年少女を思い浮かべてもえればそれ以上のことはない。

戦争当時子供だった私の記憶の情景は、前線に戦う兵士や銃後の護りに日夜つとめていた人々にくらべれば、小さいことかもしれない。だが、子供には子供の戦いの現場があった。それを書きたいと願って来た。これからもこの気持ちは変わらない。

ありがとうございます。
受賞のよろこびをお伝えする充分な言葉が見つかりませんが、心より御礼申し上げます。

生きて筆を持てる限り、少しでも長く原稿用紙に向かい、学ぶ心を忘れず励んでまいります。



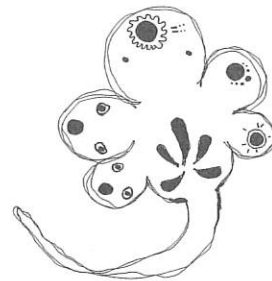
寒川靖子

さんがわ やすこ

主婦

1935 香川県生まれ。短歌結社「一路」「香蘭」から女流詩誌「ラ・メール」を経て現在に至る

香川県詩人協会、芸象文学会、青焔の会、日本詩人クラブ等に所属
著書あり 日本現代詩歌文学館振興会評議員



第5回
文芸思潮
エッセイ賞
優秀賞

セリエA^アがくれたもの

田村マイ子

「セリエA^ア……………」

今から十年前、私はある疑問をずっと考え続けていた。テレビコマーションでのタレントの言葉、イタリア、セリエA観戦にご招待！
おかしい。絶対におかしい。だって、Aはエーと読むものでしょ。

「ねえ、何でセリエエーじゃないの？」
周りにいた大人達に聞いたかどうか、今思い出せない。覚えてるのは、強烈に、これはエー以外で発音することはできないと感じたことである。ラテン語系の言語はAをアと読むことなどを知るの、それから二年後のこと。

あの頃、埃くさい画一的な制服を着て、私は常に酸欠だった。学校が世界の全てで、嫌ならやめたらいいのに、ドロップアウトする勇氣すらなく時が過ぎるのを歯をくいし

ばって耐えていた。本当はずっと本を読んで好きなことをしていたのに、どうしておもしろくもないのに笑わなくちゃいけないんだろう。どうして自分には、そんなことも話せる友達がいらないんだろう。土日は厳しい体育会系の部活でつぶれ、大好きな読書が唯一の現実逃避だった。私は今でも、あの頃が人生で一番八方塞がりだったと思っ

ていた。早く大人になりたかったのに、自分が十三歳であることに何よりほっとしていた。私はまだこれから生きていく人間なんだ、この時期だけやり過ごしてしまえばいいんだという気持ちだが、あの頃の支えだった。

ターニングポイントはそのころ、口を開けて私を待っていた。十四歳で初めて海外を訪れる機会をもったオースト

ラリア、十日間のホームステイ。広い街で得意の英語を使い、別人のように解放的でいられる自分を知った。それ以来授業中は窓の外の山の向こうより、将来英語を操って外国で生活する自分を想像し、自由になる日を心待ちにしていた。それこそが明日生きるモチベーションだった。

受験に見事失敗し、三流の私立高校に通うようになった十五歳、高校在学中の夢だった一年間の私費留学をあきらめざるを得なかった。そこで、ひたすら留学情報雑誌で安い留学や色んな方法で留学するシステムをさがし続けた。今でも制服のまま、市の図書館で目を皿のようにしてページをめくり続ける自分の姿を思い出せる。メールアドレスをメモし、資料請求し、金額をみてはため息をつく繰り返し。高校の校風は全く自分に合わずアルバイトもできない。隠れて働く方法もあったのかもしれないが、もしばれたときの処分を思うと行動に移せない、肝心なところで役に立たない血の気の多さ。十五歳。数学は五点以上とったこともなく、空気を食べても太るようなよくいる高校生だった。

虚仮の一念とはよくいったものだ。とある非営利プログラムにより、奨学金制度を利用してひと夏海外に派遣されることになったのだ。ひとつ誤算だったのは、それが英語圏ではなかったこと。派遣先は中米、パナマ共和国であっ

てやると心の中でつぶやきながら、日々を耐え抜く。くすりと笑って自分を可愛いと思えるようになったのはつい最近だ。

彼らとわかり合いたいと思っていたかは正直微妙だ。目の前の砂埃や黒人達の視線、そして貧富の差に圧倒されていたし、意味のわからない言葉で生活することに神経をすり減らしていた。ただ、日本へのホームシックにかかったという記憶はない。とにかく生きて帰ります、と書かれた絵葉書は帰国して二か月後、我が家に到着している。

すっかり日焼けし、食欲もパナマ人並みになった私はただ一人のアジア人としてパナマ人のクラスメイトに交じることも慣れている自分に気付き始めた。鼻が高いのは英語の授業で、言葉のいらぬ数学はあたりませんようにと祈るのみ。早い話、日本にいるときと何ら変わらない日々が、あたたかい温度となり私を包みこんでいた。

サッカーの授業。灼熱の太陽の下ゲームに興じ、みんなで芝生の上で大の字で寝転がった。売店で買ったコーラは、今までも、そしてこれからもあんなにおいしく感じることはないと言言できる。回し飲みして、抜けるような青空の中、来週の今頃には日本にいることを告げた。

喧嘩しあったホストファミリーとも泣きながら別れを惜

た。

あの頃、いくつかの先進国が間違はなく世界の全てだと思っていた。そして英語で全て問題ないところにスペイン語すら勉強せず降り立った生意気な子どもに、あの国は容赦なく冷や水を浴びせた。何もわからない、意思疎通ができない。貧富の差が深刻でホームステイ先は日々断水。食事すらまともに出なかった。初日にスペイン語ができないと生活できないことを思い知った。同時に、それはしゃべらなかつたら自分が存在しないということにされる。息もしていないその辺の石と同じ扱いになる。理解できない言葉でまくしたてられるのは苦痛以外の何物でもなかったが、負けたくなかつた。

現地の公立学校に通い始め、アジア人というだけで常に好奇の視線にさらされる。体育の着替え、コーラを買うときの支払い、英語の発音……。言葉がわからないというだけで、馬鹿にもされるし汚い言葉を浴びせられることもある。「ふざけんな、このタコ！」と叫びたい衝動をおさえてスペイン語で言い返した。こういう場合、日本語で言い返せばいいという話をよく聞く。しかし、私はそうは思わない。外国の土地にいる以上、そこは相手のフィールドである。自分の母国語で言い返したところで同じ土俵で戦うことには含まれまい。覚えてるよ、日本で会ったら絞め殺し

しみ、日本に帰国した私にとってAはエー、そしてアとも発音できるものとなった。帰国しすぐにスペイン語の独学に取り組み、その後のスピーチコンテストで二度入賞を果たした。そして自分がパナマで見た貧困の正体は何だったのかを突き止めるために、大学で国際関係学を専攻することを決め十八で福岡から京都へと居を移した。貧困、開発、食糧、移民……。これらを机上で学びながらも、長期休暇には一人でバックパックを背負い三〇カ国以上を旅した。

その中にはもちろんパナマでの再会も、南米での過酷な陸路越え五カ国一人旅も含まれている。大嫌いだつたスペイン語は今や日系人に間違われるほどになり、ちよつとしたハプニングも対処できるだけの度胸と愛嬌もついた。何をしているときに楽しい？ と聞かれたら「中南米の街角で踊っているとき」「スペイン語で喧嘩しているとき」と即座に答える自分がある。そんな私を「うちのじゃじゃ馬娘がね……」とパナマの家族が電話でこぼす光景も、ちつとも珍しくなくなった。

この世界には未だにAをエー、もしくはアとしか読むことを知らない人が大勢いるのではと、最近よく考える。頑なにこれはエーだ、アだと主張し続けると、互いの認識を尊重する機会を逸する。それは脆さにつながる。二三歳となり、晴れて年金の支払いも奨学金の支払いも容赦なく身



田村マイ子

たむら まいこ

1986 福岡県生まれ

2009 立命館大学卒業

8月よりメキシコで国際関係学を専攻

おもな受賞作

環境作文コンクール優秀賞

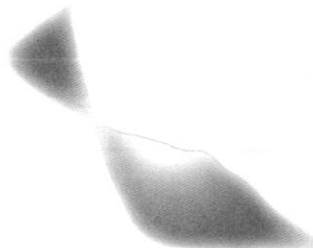
ホームステイ作文コンクール佳作

財団法人昭と池田財団主催 第27回学

生論文コンクール優秀賞受賞

「国境を越えて学んだこと～日系人にみるナショナリズムを乗り越える力～」

趣味は三味線、フラメンコ



受賞の言葉

田村マイ子

今回は素敵な賞をいただきました、大変光栄に思っております。この作品を書くことは、私がメキシコに発つ前に、自分が何者で何をもっているのかはつきりさせることにも非常に有効でした。それなりに充実はしていましたが、すべてに恵まれて何も考えなくていいような思春期を過ごしていたら、私はこのような人生を送っていなかったでしょう。

何かに怒り、悲しみを受け入れつつ能動的に動くことで自分らしい人生がつけられると今ははつきりといえます。二三年間生きてきたなかで、三〇カ国程度の国を訪れました。どの国にもそこで暮らす人の言葉やマナーがあり、それを尊重するからこそ受け入れられ心を開いて話ができるのだと知ったように思います。

これからも、ひとつの読み方で物事を語るようなことはしたくありません。この文章が掲載される頃にはすでにメキシコでの新しい生活が始まっていますが、この先出会ういろんな景色や人々が、どんどんこれまで知らなかった読み方や物差しを教えてくれることでしょう。そんな豊かな人生が待っていることに、今一番胸を躍らせています。

最後になりましたが今まで出会った全ての方にありがとうを申しあげます。

に降りかかる身分となった。しかし同時に、国際情勢やどんな身近なニュースにも、これは別の読み方を認められないからではないのかとはがゆく感じるときもある。二つの読み方を知っている私はそれを近い将来、より深い場所で見かしているとうとう自分を鼓舞している。そのときにははつきりと、「ちょっと待って。それは、別の読み方もできるんじゃない」と声をあげる用意はできている。

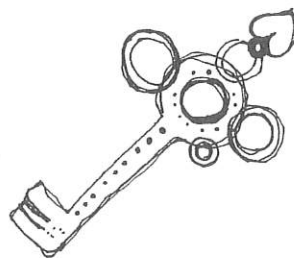
今年、大学を卒業する。中南米にこだわり続けた進路を模索し、夏からメキシコで引き続き国際関係学の研究をすることに決めた。もちろんバナマでの二〇一〇年の年越しが待っているだろう。気づけばすでにあそこには多くの家族と、芝生に寝転がって笑い合った友人がいる。つたない言葉の行き違いでつまらない喧嘩もたくさんした。でも、振り返ってみたら彼らなしの人生など考えられない、私の力のみなもとなっていた。

セリエAじゃないのはどうして？ と疑問をもったあの頃。今の自分が言えることは、違う読み方を知り私の生き方ははつきりと変わったということ、それはきつと今度も彩りを添えてくれるだろうという確信めいた予感だろう。それを教えてくれた日々は、見えない形に昇華して時折顔を出し、とてつもない機動力となってくれる。

二三歳となった今年を節目に感じる。十年前の疑問から

現在。そして十年後は三三歳、母親になっているかもしれない。そのとき子どもに授けたいことはただ一つ。あなたの目の前にあるものの読み方は一つではないということだ。読み方が何かは自分で見つけるにしろ、彼が人生で立ち止まったとき、もう一つあるかもしれないと気づいてくれたらそれはすでに武器となる。二つの読み方が彼の長い人生に糧をもたらすようにと、きつと乳飲み子に祈るだろう。

この夏、私は自分で獲得したただ一つの武器をもち、メキシコに降り立つ。



ある青年の死

藤田陽子

その青年は、枕の上でのけ反るようには顎をひく、

深呼吸のような動作を十回ほどくり返した後「ふーっ」と、顎を落とし静かに息を引きとった。何かを拒否するように眉根を寄せ、口は薄くあいていた。下唇を噛んでその様子を見つめていた青年の父である小父さんは「重信、苦しかつたらう」と肩をふるわせ、息子の頬を両手でそっと包んだ。枕元で正座のまま、最期のときを見守っていた私の祖父は、握りこぶしで涙を拭いた。

女学生だった私は、凍りついたように祖父の後ろにはりつき、息をつめ、その人が彼岸へ旅立つ瞬間を見つめていた。長崎市で、原爆の二次放射能の洗礼を受けた青年は、昭和二十年八月末の深夜、二十四歳の短い生涯を閉じた。彼の名前は林田重信さんという。

長崎市に原爆が落とされたのは、昭和二十年八月九日、午前十一時二分である。

それにより、長崎市は広範囲にわたり、壊滅的な被害を受けた。その惨状を湾を挟んで遠い対岸、島原半島の海辺に住む私たち住民は、同県でありながら何もわからなかった。

異常に気がついたのは、その夕方である。日が暮れるにつれて、海をへだてた遙か向こうの空が、横に長くどす黒い赤に染まっているのが見えた。それは正に長崎市の上空にあたる。時間がたつにつれ、真つ暗な空に広がる無気味な赤さに、浜辺の町は騒然となった。

異変に気づいた住人たちが浜辺に集まり、その異様な光

景に息をのんだ。私も大人たちに混じり、夕陽の赤とはちがう、血を流したような空を見つめ立ちつくした。ひどく蒸し暑かったのを覚えている。その空の下で、万を超える人たちが、死のふちに喘ぎ、業火に追われ、水を求めて、川のなかに折り重なって落ちていったという。

そんな地獄絵さながらの光景がくり広げられていたことを誰が想像し得たであろうか。

その翌日、目と口の部分だけを出し、全身を白い包帯で巻かれ、体が大きく膨らみ男女の区別もつかない被災者を助手席に乗せて、市内から避難してきたトラックの運転手の口から、その惨状がもたらされたのである。

林田重信さんの生家は、のどかな山間の集落のなかにある。彼の父上と私の祖父は、兄弟のように仲の良い親友だった。子どものころ祖父に連れられ、ときどき、農家である林田家へ遊びに行った。黙々と家業を手伝う重信さんは、たまに会う私を妹のように可愛がってくれた。私は彼を「重信兄ちゃん」と呼んだ。

端正な容姿を持ち、働き者の好青年であった彼が、長崎市内の或る軍需工場に働きに行った経緯は、子どもだった私は何も知らない。その日（原爆投下の八月九日）彼は、職場の夏休みで実家にいたそうである。

ある青年の死

原爆投下の翌日、長崎市の惨状を知ったまじめな彼は、

トラックなどを乗りつき何時間もかけて市内へ行った。そこに二泊して潰れた工場のと片付けを手伝い、疲れ果てて実家に帰って来たという。その三日後に戦争は終わった。

そのころから彼にひどい下痢が始まり、食事も摂れなくなった息子を見かね、小父さんが祖父に相談にきた。海辺の町であるわが家の側には病院が三軒ある。

「なんばしよとつかっ（なにをしてくるんだっ）。早う、家に連れてきて医者さんに診てもらわんかっ」。珍しく祖父が気色ばんだ。翌日の昼ごろ、木と竹で作られた急ごしらえの担架に乗せられ、上半身を少し起こした状態の重信さんが、わが家の裏庭に運ばれて来た。

屈強な若者が五、六人と小父さんがいた。二十数キロの上り下りの山道を、交替で担いで来たのにちがいない。

「重信さん、きつかったらう」と、いたわ労りの声をかけながら祖父母が迎えた。私もその後ろからそっと覗いた。

学生生活を寄宿舎で過ごしていた私は、何年も会っていない「重信兄ちゃん」が懐かしかった。が、その顔を見た瞬間「はっ」と胸をつかれ、慌てて目を逸らせた。

かつて、爽やかな好漢だったころの面影は消えうせ、頬がこけ、小さくなった彼の顔は、鼻の高さばかりが目立つ土気色に変わっていた。「重信、小父さん、小母さんお世話になりますって言わんね」と、これも憔悴した顔の小父

さんが言うのと、病人は弱々しいほほえみを浮かべ、こくんと顔を閉じた。

早速、座敷に敷かれた布団に寝かされた彼は、ぐったりと目を閉じたまま、吸いのみでお茶を少し飲んだ。介抱のため小父さんが残った。やがて、急を聞いた医師がかけつけたが、どんな診断がくだったのかは知らない。

夏休みで家にいた私は、たとえ病気であれ、子どものころ憧れたお兄さんがわが家にいることが気になり、落ち着かなかつた。宿題も手につかず病人と小父さんがいる座敷の閉められた襖の外を、うろうろと歩きまわり祖母に目で叱られた。

ときどき私がお茶を運ぶ、「お兄さんお茶よ」「ありがとよ、大きくなつたね。もう女学生か」などと、しほり出すような声で喋り、精いっぱい笑顔顔を浮かべてくれた。

吸いのみのお茶を、全部、飲んでくれたことが嬉しく「お兄さんは治るにちがいない」と信じた。

毎日、午後、診察に来ては首をかしげながら帰って行く医師が、ある日「ちよつと、いいですか」と、祖父に声をかけ庭の隅のほうへ連れて行った。私もその後が続いたが、二人の様子にただならないものを感じ、少し手前の木の陰にかくれた。

そこで、信じられないような、医師の言葉を聞いてしまったのである。「あの病人さんは、後、四、五日しか持た

なつた息子の顔を、握りしめたタオルで拭き続ける小父さんの姿を、私たちは声もなく見つめていた。

その昼ごろ、重信さんは、つい一週間ほど前に乗せられてきた担架に、今度は、全身をすっぽりと毛布にくるまれ寝かされた。子どものように小さく見えた。目を真っ赤に泣きはらし、憔悴しきつた小父さんは、担架の側に立ち、物言わぬ息子に「重信、小父さん、小母さんお世話になりましたって言わんね」と呼びかけ、自ら「小父さん、小母さんお世話になりました。ありがとございました」と、祖母母に向かい深々と頭を下げた。

祖父は目を腫らし、祖母は手拭いを目に押しあてたまま、肩をすぼめていた。

やがて、担架は若者たちに担がれ、裏門から出て行き、肩を落とした小父さんを支え、祖父が同行し、祖母と私は、県道から山への坂道に差しかかる所まで見送った。

暑い日差しの中を、揺れながら坂道を上って行く担架に向かい、祖母は数珠をかけた両手を合わせ、何ごとかを祈り続けた。「お兄さん、さようなら」——遠ざかって行く担架を見送っていた私は、急に、祖父と一緒にお兄さんについて行きたいという衝動にかられ、坂道を上りかけた。が、祖母を一人には出来ない。

五、六歩上りかけた坂道で、くると踵を返し、訝る祖母を残したまま、家に向かって走り出した。一週間の複雑

と思いますよ。もう、腸が腐つとります」。急きこむように祖父が聞いた。「一体、何の病気ですか」「いやあ、私も初めて診る症状で、よう分からんとですよ。覚悟だけはしといて下さい」と言った。

「お兄さんが死ぬ」

衰弱が激しく、問いかけにもあまり反応しなくなった彼の病状は、もう、誰が見ても絶望的だった。それでも「死」を信じたくなかつた私は、木に寄りかかっていたまま、消えていく命のはかなさを思い、胸がせまり唇を噛んだ。

その後、親子の顔を見るに忍びなくなり、病人がいる部屋には近づかなかつたし、祖母に用事を頼まれても行かなかつた。

何の病気かわからないが、少量の水分しか摂れなくなつた限られた命は、もうすぐ消える。可哀相であり、ただ、虚しかった。

そして遂にその刻がきて、彼の魂は、それまでの苦しみから逃れるように天へと昇って行ったのである。

虚脱状態で、息子の側から動けない小父さんを労りながら、祖父母が彼の枕元に供養の物を供えた。ローソクに灯がともされ、線香のけむりが揺れた。いつの間にか、彼の顔には白い布がかけられ、祖父が低く唱える枕経で、息づまるような空気がほぐれながら夜が明けた。

白布をそつとめくり嗚咽しながら、土気色のまま小さく揺れた想い、体中に張りついた虚しさをふり払うように走り続けた。走りながら見た山も、海も、視界のなかで白っぽくぼやけて、揺れて、ふくらんで、頬の上をすべり落ちていったのを思い出す。

「何の悪いこともしていない息子が、業病で死んだ」と、小父さんが嘆いたと聞いたが、業病などではない。まだ、燻っていた工場の焼け跡を、二日間にわたり片付けた際に受けた二次放射能により、若い命は奪われた。

しかし、それが原爆症とわかつたのは、ずつと後のことである。



藤田陽子



ふじた ようこ

1930 長崎県生まれ
 旧制高等女学校卒業
 52 美容師免許取得
 2007 7月木村治美エッセイ大賞受賞
 07 第3回文芸思潮エッセイ賞入選

厚木市同人誌「みちのり」に所属

受賞の三昧

藤田陽子

第三次通過通知を書面で頂いた時点で、「私の文章力では、もう、この辺りで十分だろう」と思い、それ以上のことは諦めておりました。所属している同人誌の会員にも「そこまでいけば、大したものだよ」などと、おだてられて納得、すっかりその気になっていたので。

ところが、八月三日（月曜日）の夜、五十嵐編集長より「優秀賞受賞」の知らせを頂き、驚きと戸惑いで気持ち舞い上がってしまいました。喜びがじんわりとこみ上げてきたのは、翌日になってからです。

これは、女学生だった私が、目の当たりにした、原爆被爆者であった青年のいたましい最期のようなすを、平和への祈りと願いをこめて書いたものです。

拙作を読み、評価して下さった選考委員の皆様、本当にありがとうございました。

頭のなかが壊れない限り、これからも書き続けたいとの思いを新たにしております。

第5回

文芸思潮

エッセイ賞

優秀賞

自爆

木戸竜之介

私は或る企業の研究所に五〇年以上も勤めた研究者であり、或る実験について、二〇年、三〇年後に必要があつて思い出した「疑えない記憶」が、文献で確認すると違つていた経験が何回もある。したがつて、これから述べる六五年前の話は、多くの点が真実ではなく、長い年月を経たために、むしろ物語に近いものになっているかも知れない。

東京都と神奈川県西南の境界は清流多摩川である。戦時中、二子玉川付近に、多摩川の河川敷が北側に大きく広がっている所があつた。多摩川の流れる南の川崎市側に寄つており、河川敷は水面より二メートル位の高さで、全く平坦になっていた。当時、この河川敷には、川の流れとはほぼ並行に一本のアスファルトの滑走路が、西から東に作られており、その西の端に格納庫が二つあつた。読売新聞社

の飛行場であり、一つの格納庫に滑走距離の短い小型機一機が入つていた。この飛行場にはグライダー・クラブがあり、もう一つの格納庫にグライダーの初級機が二機と中級機が一機入つていた。

昭和一九年四月頃、私は旧制中学四年でこのグライダー・クラブに入会した。グライダーの初級機は一チーム約二〇人で練習する。直径が二センチ程で長さ一〇〇メートル強のゴム索をV字型にして、その両脚一本ずつに八人か九人が配置につき、これを号令にあわせて引いて行く。V字の頂点には丸い金具があつて、これがグライダー先端のカギ状の金具に掛けてある。グライダーの最後尾には、直径一センチ、長さ一メートル位の木綿の尾索がついており、一人が地上に打ち込んだ杭に、これを掛けて手で保持する。

他の一人が左の翼端を右手で持ち、翼を水平に保つ。そして残る一人が搭乗者で、機体先端の全身むきだし操縦席に乗ってバンドで体を席に固定する。つまり、大きなパチンコでグライダーを射出するのだ。一人乗る度にポジションを一つずつずらし、約二〇回に一度、乗る順番が巡ってくる。私は学生なので、訓練は土曜と日曜にしかできなかった。

この飛行場にネコジャラシや野菊が一杯に育っていたから、晩夏から中秋の頃であろうが、突然陸軍航空兵の一回が、この飛行場でグライダー訓練をすることになり、毎朝、数台のトラックに数機の初級機をバラして持って来て、素早く組み立てて使っていた。彼等は本当に初めてグライダーに乗るところから訓練を開始したが、まさにスパルタ教育で、民間人の我々とは違い、一課目を一回の飛行で習得させ、二回目はもう次の課目に進んで行く。生徒は必死でついていくが、とてもこのペースを守ることができず、最高高度が五メートルになる頃から墜落事故が続出し、持ってきた機体を其の日の内に全部壊してしまうようになった。しかし、翌日はまた真新しい機体をずらりと持って来て、全部壊すという風であった。こうして週末だけの我々は彼等に忽ち追い抜かれ、陸軍航空兵達は中級機を持って来るようになった。中級機は初級機と違い、操縦席の回りに木と布で作られた流線型の風防胴体がついている。中級機は

軍の人達はテキパキと機体の残骸や乗員をトラックに積んで、素早く引き上げていった。見ていた我々は、全員、体の震えが止まらないので、訓練は中止になった。

それから二週目位であったと思う。この日、私の課目は「左旋回」であり、それには少しでも高度が欲しかったので、機体を土手の上のせ、そこから飛ばすことにした。これは中々うまくいって、同じ課目の友人が飛んだとき、最高で一五メートル近い高度が取れていた。私の順番が回ってきて、座席に坐りベルトをしめ、両足をフットバーにのせて軽く交互に踏み、方向舵の動きを確認し、股の間の操縦桿を前後左右に動かして尾翼の昇降舵と主翼の補助翼の動きがスムーズであることを確認して、教官に合図を送った。「引け」の号令でゴム索が伸び始めると、機体のきしむ音がし始めた。「放せ」の号令で、尾索が放され、私は一人で空へ飛びたった。さすがにいつもよりずっと高度があり、ゴム索を引く人々が小さく見えた。左旋回に入ろうとしたとき、右の方から

「どけー、どけーっ」と言う大音声がして、右を見た私の方へ、真っ直ぐに陸軍の中級機が突っ込んでくるのが見えた。このままでは空中衝突する。私は急降下すべく操縦桿を前へ押しながら、はやる心をぐっとおさえて、ゆっくりと操作した。これは急に下げ舵にすると機首が下がる前に、昇降舵のついている尾翼が後部胴体を持ち上げてしまう

滑走路を使い、一〇メートルのワイヤーをつけて、自動車で引っ張って上げる。

陸軍航空兵の人達は、やっと操縦ができるようになったものの、全く心に余裕のないまま空へ上がる。上空には常に風があるので、自由に機体を操れない彼等は流されて飛行場の外に出そうになる。南風や西風に流されて、飛行場の外壁をなしている土手を越えると、そこは現東京都世田谷区玉川町の住宅街であり、着陸すれば、人命と人家に危害を加える事故になってしまう。このため、飛行場外に出ることを禁ずる、という厳命が出ていた。我々は彼等から最も遠い、滑走路東端から滑走路と直角に北へ行つて街との境界に近い土手の付近で訓練することにした。

或る西南風の日であった。航空兵の中級機が高度二〇か三〇メートルで我々のいる方へ近付いて来た。必死に機体を場内へ入れようと努力していることは、昇降舵や方向舵や補助翼の動きで判るのであるが、機体のスピードが不足していて、どの舵も十分に効かない。とうとうフワフワと機体は街の上に出かかってしまった。軍の命令は絶対である。中級機は飛行場内を目指して急降下に入り、そのまま土手のほぼ真上に垂直に自爆して地面に突き刺さった。両翼は根元から折れて砕けながら四散し、風防胴体は提灯をたたんだときのような形につぶれた。その中に搭乗者がいるのである。操縦者の生死は我々には判らなかつた。陸

ので、かえって空中衝突し易いと判断したからである。しかし、このゆっくりとした操作はほんの一秒に満たない時間にすぎないので私には物凄く長く思えた。轟然と羽音がして、私はガクッと体が下がったのを感じた。中級機が頭の上をかすめ去ったのである。しかし、私は高度が僅か三メートル位しかない所から急降下したのだから、地面はもう数メートルの眼前に迫っていた。自爆を避けるために、私は操縦桿を手前に引いたが、このときも操作が速すぎないよう、近寄る地面を見つめながら操作し、地平線が視界の上の方から正面に降りてくるのに操作をあわせるようにした。こう書くと、長い時間のようにだが、これもほんの一秒位のことである。機体が水平になったとき、座席の下の櫂こが地面の草の頭にさわるピンピンという音がした。それからスピードの出すぎている機体は上昇し始めたので、そのまま上昇した。機体が左に傾いていたので、これは補助翼で修正した。機体は高度約三メートルで理想的な水平飛行に入った。私も、こんなに見事な水平飛行ができたのは初めてであった。急降下のために猛スピードが出ていたせいである。そのうち、次第に速度がおちるにつれて高度は下がり、座席の下の櫂が草にさわる音がすると間もなく、両足で踏ん張っているフットバーが機体の先頭なので、ここに当たる猫ジャラシの頭や、白い花で中央が黄色い野菊が、パシッ、パシッと音をたてて、座席の下へ消えて行くのが



木戸竜之介

きど りゆうのすけ

1929 (昭和4年) 東京生まれ。80歳
 51 東京工業大学応用物理科卒業
 同年4月 東京計器(株)入社、以後、
 2005年まで同社にて船舶用計器の研究開発に従事。
 1968 工学博士(東北大学)
 87 紫綬褒章(ジャイロ装置の発明)
 2008 「荒る、海」で第4回銀華文学賞当選
 栃木県那須塩原市在住



受賞の言葉

木戸竜之介

二〇〇七年に、初めて銀華文学賞に応募しましたところ
 当選し、残りの人生で真面目な散文を少しは残したいとい
 う気になりました。
 早速、文芸思潮の定期購読を始めましたら、小説だけで
 なく、他方面のすぐれた作品に接し、中でもエッセイは三
 〇歳前後を最後に、その後全く書いておりませんでしたの
 で、すぐれた作品を読ませて頂き、また書いてみたくなり
 ました。こうして年老いて再開したエッセイの第一作が「自
 爆」です。
 日本の男の平均寿命を越えておりますのに、ペンを取る
 と自然に青春の主題に走ってしまう私に、自分がこんな
 も戦争を引き摺って生きて来たのかと、思いを新たにして
 おります。
 優秀賞に選ばれるとは思ってもおらず、勉強させて頂く
 つもりで投稿しました。評価して下さった選考委員の皆様
 に心から御礼申し上げます。

見え、やがて野菊の咲き乱れる中に機体は止まった。もう、
 前方に多摩川の水面が野菊の隙間から見えていた。チーム
 の皆が駆け寄って来るのを待つ、ほんの短い間、私は生ま
 れて初めて、実に不思議な気分を味わっていた。

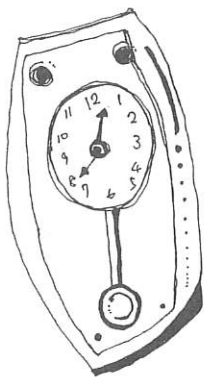
私自身もやがて戦場に狩りだされ、おそらく死ぬ運命で
 あること、死ねる覚悟が全くできていないことなど、常に
 苦しみ続けていた悩みのすべてが、突然、私の胸の中から
 消えていた。不意に無心になった私の目に入ってきた多摩
 川の、水面に反射する陽光のきらめきや、顔と同じ高さ
 ずつと広がる野菊の花々や、顔をなでて行くさわやかな微
 風が、すべて、心地よく、素晴らしく、いとしいものに思
 われた。そしてつい先程、頭上を通り過ぎた中級機の羽音
 が、もう遠い昔だったような気がしたのである。

機体を押し出発地点に戻った私達は、あの中級機が、
 やはり場外に出そうになって自爆したことを聞いた。

その後、米空軍の東京空襲は激しくなり、殆ど滑空訓練
 はできなくなっていた。昭和二〇年三月一〇日の下町大
 空襲、四月末、五月末の山の手への絨緞爆撃などで、東京
 の街は灰燼に帰した。この頃には神風特攻隊による沖縄周
 辺に展開する米軍艦への自爆攻撃が、連日のように、新聞
 とラジオで報道された。八月一五日、終戦を迎えたが、あ
 のまま戦争が続いていたら、私は疑いもなく、特攻隊要員
 にされていただろうと思った。

当時、今の世田谷区玉川町で、読売飛行場のすぐ外に住
 んでおられた方々は、おそらく、お一人も、隣の飛行場で
 操縦桿を一杯に押し自爆した若者が何人もいたこと、そ
 して彼等が命がけで貴方達の街を災害から守ったことを、
 今もってご存知ないであろう。

一方、八〇歳近くまで年老いた私は、あの日、着陸した
 野菊の草原で味わった、周りに広がるすべてのものをいと
 おしむ気持は、一体どこから来たのか、今もよく解らない
 ままに、私にとって暗黒の青春だった終戦前後の中で、一
 つのともし灯のような懐かしい思い出となっている。



ラマダン

益田勇氣

中東の地域には、ラマダンという期間がある。イスラーム教の教えによるもので、期間中の一ヶ月間、モスリムは日の出から日没まで一切の食べ物、飲み物を口にしない。

私は幼い頃、父の仕事の関係でUAE（アラブ首長国連邦）に住んでいた。直にラマダンに触れた私は、意義など深く考えずに、安易な心持ちでラマダンをやるうと思っただけであった。

UAEは豊かな国だったが、貧富の差が激しかった。私は父の会社から与えられた豪華なビルに住んでいたから、当時熱中していたサッカーをする時も、ナイター付きの芝生のグラウンドを使うことができた。しかし街では砂埃の舞う路地裏で、ストリートサッカーに興じるアラブ人やパキスタン人をよく目にした。

て、友人らと共に押搦しあうことは仕方ないことだと思っこともあった。それでも心底では、彼らの前では言うなよ、と思っていたし、弟が汚い言葉を吐くたびに後ろめたい感情が渦巻いた。彼らはいつでも黙ったまま、弟らの暴言を受け入れていた。それをいいことに、私は弟に注意をすることができなかつた。そのせいで彼の行動がエスカレートしたのかもしれない。

弟の石は一人の少年の額に命中し、血が流れた。何を言われても静かにそれを受け入れていた彼らの間に、ざわめきが起こった。何人かの少年が、激昂した様子で勢よく詰め寄ってきた。弟は彼らの豹変振りに怯え、私の背後に隠れ震えていた。

私はあまりの迫力に咄嗟に逃げようとしたが、その場を離れることができなかつた。弟の前であつたから、兄としての見栄もあつた。そして何よりも、彼らに対する罪悪感が拭い去れなかつた。

袋叩きにされる覚悟で、詰め寄る少年たちに謝った。弟が石を投げたこと、今まで暴言を吐いてきたこと、それらは確実に彼らを傷つけていたはずだつた。私自身の中にも、どこか彼らを見下すような思いがあつた。言葉が少ししか通じないのもあつて、日本語で精一杯謝つた。彼らに殴られるという不安と、自分の行いの恥ずかしさが相まって、声がうわずつていた。

グラウンドの目と鼻の先にも、ごみ収集箱やモスクの壁をゴールに見たてて遊ぶ少年たちがいた。私は彼らもこちらに入れてあげたいと思っっていたが、それを実際に口にすることはなかつた。暗黙のうちに冷たいルールがあることは、幼いなりにわかつていたからだ。

大人たちは、間接的にしろ、私を彼らから遠ざけようとしていたし、転校の多かつた私は、強者と弱者が交わることが決まてないことを感覚的に知っていた。弱い者を助けることは、自らもがいじめられる対象になるということを肝に銘じていた。

ある時、弟が彼らに石を投げた。弟はよく彼らを囃すことがあつた。確かに彼らの身なりはお世辞にも綺麗とはいえないものだった。五つ下の弟が、くさいくさい、と言っ石が直撃し、うずくまっていた少年が、ゆっくりと立ち上がった。依然として激昂する少年たちを抑えながら、静かに歩いてくる。私は胸が高鳴るのを感じた。そして覚悟を決めた。彼は私の前に立つと、こちらにやわらかい笑顔を向け、私にそつと握手を求めた。私はそれが意外すぎて、はじめ彼が握手を求めているということ解さなかつた。彼は許してくれるというのだ。それは私にとって考えられないことだつた。彼はどんな思いで手を差し伸べてくれたのか。今でもふとそのことを考えることがある。これくらいでは苛立ちや悲しみが生まれぬほど、大きな悲しみを抱いていたのではないか。陽気さの背後には、少年にふさわしくない孤独が横たわっていた気がする。

あたたかい掌は弟にも差し出された。弟は極度の緊張から解放され、うつつらと涙を浮かべながら頬を緩めていたから、おかしな顔になつていった。それを見て彼は笑い、私も思わず顔がほころんだ。怒つた少年の中にはなおも不満そうな顔をしている者もいたが、彼の一言で、皆でサッカーをすることになった。弟が嬉しそうにボールを追っている姿を見ると、胸が熱くなつた。彼らの優しさに触れた気がしたからだ。

私はその少年と仲良くなつた。ユハヤという名のアラブ人で、父親は魚売りをしていた。

ある日、ストリートサッカーに私も参加していると、彼

が明日からは来れないと言った。ラマダンが始まるのだ。老人と子供、妊婦は断食をしなくていいという決まりだったが、父や母の前で、水分や食物を補給することは避けたいのだと言った。

私は彼の心意気に心をうたれ、僕もやる、と片言のアラビア語で言った。「そうか！でも生半可な気持ちじゃできないよ」そう言いながらも、彼は満面の笑みを浮かべていた。

断食は思いのほかきつかった。空腹はなんとか凌ぐ事ができたが、砂漠の国では灼熱の太陽が身体の水分を奪う。夏場はフライパンを外に出しておけば、それで目玉焼きができるほどだ。喉の渇きは幼い私には相当苦しいものだった。

しかし、肉体的なものより精神的なことのほうがつらかったかもしれない。昼食のときなど友人らの弁当を横目で見ながら、ひたすら耐えていた。担任の教師や友人に、どうしたんだ、と問われて、ラマダンをしているというのは少し恥ずかしかつた。母が泣きながらやめてくれ、と言うのもつらかった。お願いだからご飯を食べてちょうだい、と毎日弁当を無理やり私の鞆につめた。私は食べたふりをして、ゴミ箱に捨てていた。それを知った母は涙を流しながら父に助言を求めている。息子の体を心配したのだろう。私はどうにもつらくなってしまい、結局ラマダンが始まっ

て一週間で投げ出してしまった。自分は日本人なのだから仕方ない、文化が違うんだ、などと思うことにし、自分を正当化していた。けれども、そのせいで彼に会いにくくなった。約束を守れなかったからだ。私はつらさから逃げるかわりに、彼を避けるようになった。

ラマダンが終わっても、それは続いた。何度も正直に言おうと思ったが、彼を見かけると、どうしても足がすくんでしまった。

これではいけない、とある日、勇気を振りしほり告白した。彼は神妙な面持ちで聞いていたが、やがて、「僕もできなかったから平気だよ」と言って笑った。私はそれが嘘だと知っていた。彼の乾燥した色の悪い肌は、見るものにその事実を判然とさせた。彼はつやのない手を差し出し、これからもよろしくね、と言った。私は泣きそうになりながら彼の手を握った。はじめて彼の手を握ったときと、まるで別人の手だった。ラマダン明けのあつすぎる夜、ひどくガサガサとした彼の肌の感触が、私の冷たい掌を包んでいた。



益田 勇氣

ますだ ゆうき

1987年生まれ

幼少期をアラブ首長国連邦、アブダビ市で過ごす

楽団「くだびたり」を主宰

老舗シャンソンバー「青い部屋」等で活動

その模様を掲載したブログ「地蔵巡り、道中座してヒトデを購入」がコンテスト

で佳作

日本大学芸術学部文芸学科4年

受賞の言葉

益田 勇氣

小さな文章を書き始めたのは、ちょうど一年程前だったと思います。高校の時分より、小説を書きたいという思いがありました。実際に筆を握ることは殆どありませんでした。書くことと思っても、書けない。少し書いても、完成させることができない。当時の私は、かっこよく生きたい、ということが先行して、文章を書くということについて深く考えることはありませんでした。

私の幼少時代は圧倒的に恵まれていた気がいたします。アラブではそれが顕著でしたが、日本でも大差はありません。しかし、私にはそれが一種のコンプレックスになって

いました。恵まれているということは、普通ではないという事で、大人からすると幸福に見えても、子供からすれば、自分と周りとの間に大きな隔たりを感じるものでした。特別視されるということは、間接的に仲間ではないとみなされることで、相手と深くつながることができない。こちらがそう願っても、私の背景にある事実があるかぎり、心底では受け入れてもらえない。私は仲間に入るためにおかしくなるとばかりでした。普通になるためには普通でないことをするのが、当たり前になっていました。そのうちに、本当に人と深くかわるということが怖くなってゆき、自分はどうのように生きてゆけばいいのか、と考えるようになっていました。

一年前、中学の時分によくない関係にあったおじさんに出会いました。性的なものです。けれど、考えてみると、私は彼としか濃密な人間関係を結べなかったような気がしました。以来、人との関わりを書きたいと思うようになりました。しかし、いざ机に向き合くと、やはり書けない。私は文章を書くことに慣れようと、小さな文章を書くようになりました。

一年が経ち、少しは上達しているのかという不安がありました。そんな中届いた幸運でした。誇れるものが何もない私には、ささやかな自信になります。本当にありがとうございます。

ビワ物語

田中ひかり

橙色に熟したとりたてのビワ。柔らかい皮を指でむく。六年ぶりに収穫したビワは、昔と同じ手触り、同じ味――。

あまりにも遠く季節さえ忘れてしまったある日、家の狭い狭い敷地の片隅に、背丈一五センチほどのビワの木を見つけた。幼稚園児だった娘が土に埋めた種から発芽したビワだった。小枝より細い幹に緑色の葉をつけ、地面にふんばっていた。

ビワは生命力が強い木なのだろうか。何の手入れもせず日当たりの悪い場所だというのに、雨水だけで生き続けた。私はたまに思い出して、わずかず大きくなるのを確かめていた。娘をまんやかに長男次男と、三人の子どもたちも気まぐれにビワを見に行った。特別大切なものでもなく、さりとして忘れ去られることもない、家族からも片隅にいた

ワに追い越された。

そして六年目、種を蒔いてからはたぶん八年目の春。さらにごんと大きくなったビワは、初めて青い実をつけた。小さな実は春の暖かさでふくらんでゆく。収穫を待つ子どもたちの無邪気な眼。五月下旬の雨上がり、実は一気に熟していた。

「ねえもう食べていいんじゃない?」

「お店のより小さいねー。かわいいねー」

六月初め、家族がそろった日、色づいてふくらしたビワをおそろおそろの大切にもぎ取った。ビワを見てはしゃぐ仲の良い子どもたち。おいしいビワ。一人前になったビワ。話題と笑顔を作ってくれるビワ。種を埋めた娘は中学生になつていった。

翌年、また大きくなったビワは昨年何倍も実をつけた。食べきれず近所や友達におすそわけ、そしてジャムを作った。特に娘はこのジャムを喜んだ。ビワのジャムはそれから毎年恒例になり、何時間かかる皮むきで指先が茶色く染まることさえ楽しかった。あちこち配って喜ばれ、ジャム作りは私の年中行事になった。ビワの木は我が家の密かな自慢、一年ごとに大活躍する存在になった。

けれど、ビワの成長をよそに、やがて娘の心は閉ざされた――。

ビワだった。

娘が小学二年生の冬、我が家は引越すことになった。「ビワ、持っていこうよ」

次の住居には庭ならぬ「地面」があった。まだまだ小さかった赤ちゃんビワは、私たちといっしょに引越した。

私道沿いの午前だけ光が差す乾いた地面。生い茂るドクダミを掻き分け、ビワの新しい居場所が作られた。

一年二年三年、時は過ぎてゆく。幼い子どもたちの成長に合わせてようにビワも成長してゆく。いつのまにやらしっかりと地面に根を張ったらしい。枯れてしまいそうな頼りなさはなくなっていた。

四年五年、相変わらずほったらかされたまま、ビワは年々たくましくなる。存在を主張するかのようになり大きな葉を揚げ、空に向かって伸びる。子どもたちの背丈はとうとうビ

家族に背を向けた娘。家の中でひとことも口を利かない娘。冷たく醒めた眼差ししか見せない娘。何を言っても反応しない娘。家族を拒絶し何も望まない娘。高校一年夏の終わりに始まった、反抗期と呼ぶにはあまりにも痛々しい変貌。そうさせてしまった原因は私たち親であることが情けなく、なす術も見出せずただ受け止めていた。家の空気はいつも寒く沈んでいた。

それでもビワは毎年できる。私は黙ってジャムを作る。おいしいのに悲しくなる苦いビワ、娘のビワ。無言でジャムを食べる娘に話しかけることもできなかった。

そのままさらに月日は流れ、子どもたちは次々と大学に通うため家から巣立っていった。

娘は最後まで無言のまま出て行った。そしてビワとともに越してきてから十二年目、次男が家からいなくなったあと、とうとう私たち親も、また引越すことになった。

大きなビワの木、二階の窓から実を取れる。伸びすぎた枝を毎年切らなければならぬほど見事に成長したビワの木。今度はずいぶん、ああとでも、連れてゆけない。残してゆくわけにもいかない事情でビワの木を切った。根元まで切った。何週間もかかって少しずつ切った。ビワの切り株だけが、たったひとつの切り株だけが残り、地面は、そこに大きな木があったなんて信じられない、狭く虚しい殺風



田中ひかり

たなか ひかり
静岡県生まれ、静岡県在住。
趣味でピアノを弾いている。20
年以上細々と練習中。
平成12年に自分のホームページ
を立ち上げたのをきっかけに詩
やエッセイなどを書き始め、平成
18年までの間、文章とピアノ演
奏を公開していた。



受賞の言葉

田中ひかり

この度は優秀賞をいただき、大変嬉しく思っております。
この作品は、いつかビワの実ができたら書こう、と何年も
温めていたテーマであり、自分でも特に気に入っているエ
ッセイです。そして読書家でもない不勉強な私ですが、言
葉や活字は好きで、一度自分の作品を広いところで試し
てみたい応募しました。受賞は私の良いエピソードになり
ます。ビワの木にも感謝感謝、ますます思い入れの強い
ビワになりました。ありがとうございました。



景。

けれどもビワは新しい命を作っていた。地面に落ちた実から小さなビワがいくつも生まれていた。その苗木のひとつを選び、私たちは連れて引越した。

途方に暮れていた日々だった。氷の上を歩くようなあやうい引越しだった。倒れこむようにたどりついた先で、裏庭に出るたび私はビワに声をかけた。

「おまえが一人前に実をつけたら、またジャムを作るからね」

「娘に食べさせたいんだからね。がんばれ。枯れるな」

「おまえのママは立派だったよ。命を引き継ぐんだよ」

ビワが枯れてしまったら希望も消えてしまうような気がして、祈った。

娘にも小さなビワの木を見せた。

「ほら、ちゃんと連れてきたよ。何年かしたらまた食べられるよ」

願いでしかないことを、私は明るく一人芝居。黙ってビワを見ていた娘は何を思っていたのだろう。

冬を越えた。いくつも冬を越えた。不安な日々の中、

ビワはかほそく生き延びた。待つことしかできなかった。

ビワに実ができる日を、娘が笑ってくれる日を。私はたま

に様子を窺いながら、何年も何年も、待つことしかできなかった。

頑なだった娘は、この家に引越した頃から、まるでビワの成長のように少しずつ、ほんの少しずつ変わり始めた。

硬い表情はときどき柔らかくなり、ぶっきらぼうに返事をくれるようになり、言葉をかわせるようになり……。ついに、とうとう、笑ってくれるようになった。

越してきて六年目、この春、ビワは初めて実をつけた。

昔のように仲の良い三人の子どもたち。時は流れめぐりめぐって、家族みんなそれぞれ生活が変わり、そして再びやってきた、ビワではしゃぐ初夏。今、私は夢見た日のかにいる。

「ビワができたよ」

近くで暮らしている娘にメールを送る。

「ジャムを作るほどの数はないから、ビワゼリーにトライしてみろね」

ビワを餌にして娘を呼び寄せたい私なのだ。

「広島菜」によせて

安芸 遥

ふるさと広島に帰省すると、みやげの一つとして「広島菜」の漬物を求めるようになって久しい。

土産物店に立つと、自然に手が延びそれを求める。その瞬間に脳裏に巡りくる風景は、今や六十余年の歳月を遡ることなのに、なお鮮明に浮かんでくる。最近になってもう一つ、それ以上に大切な思いに駆られるようになったのだ。

この広島菜漬を初めて食したのは、戦後すぐのことで十歳のころであった。それまでの菓物の漬物の中心は白菜だったのに、突然のように、県中央部のわたしの村でも、これを栽培し漬物にするようになった。どこから、なぜやってきたのだろうかなどと詮索することもなく、ただただおいしかった。今にして思えば、その風景が味を何倍にもして、

舌と心を酔わせたに違いない。

当時はまだ、農村の機械化はまったく進んでいなくて、鋤、鍬、鎌、千歯（手こぎや足踏み脱穀機）などでの手作業であった。田植えや稲刈りの時期には、小学校でも農繁休日があった。早朝から日が沈むまで、家に帰ることなく働かねばならない日もある。そんな日は、弁当やおやつも田圃に持っていく。

おやつは、畦道に腰を下ろして一息入れながら、お捻りに入った藪あわれや炒り豆を、巧く口に放り込むのだ。昼食は、田圃の近くの「はんや」とよぶ物置小屋にむしろを敷いて、手伝いの人や家族全員が車座になって摂る。「はんや」は体裁よく言えば東屋あずまやだから、初夏にはすがすがしい風が通り、実りの秋には爽やかな青空も見えて、子供心にはこの

上ないうれしい会食だったのだ。

子供のころ、「正月三日、盆二日、祭りが一日ひていでやれかなし」と、よく口にしたものだ。寂しい山村では、親しい人が集って食事をする機会は少なかったから、野良仕事の手伝いが厳しくても、この田圃での会食はそれを上回る喜びがあったように思う。

会食などといえば、なんとなく非日常的な御馳走が想い浮かぶかもしれないが、まだまだ麦飯の時代で、巻き海苔だって簡単には手に入らなかった。そのバラつくご飯を引き締めたのが広島菜の漬物だった。鮮やかな紫蘇の色に染まった梅干を芯に、幅広いその漬物の葉で包んで食べる。

その朝、鶏が産んだ卵焼きでも添えられる日は大御馳走である。今で言うデザートには、田植えのころなら取り立ての茹で空豆、秋は柿や茹でた山栗だ。大きな薬缶に沸かした湯の中には、これも手もみの自家製の茶葉をガバッと入れた。口が曲がり目が覚めるほどに濃い茶を、それぞれの茶碗に注ぐのだった。ご飯はお櫃ひらのままだったり、大きい入れ子（重箱）だったり。添え物は小さい入れ子に入れた。茶碗や箸はざるに入れ、それらのすべてを大風呂敷で包む。それを丸みのある逆三角形をした負い籠ひらに入れて運んだ。子供の手伝いの中では大仕事だったが、いま、思い出すだけでも楽しくて頬が緩んでくる。戦後のわずか数年間だけだったのに、広島菜漬で包んだご飯がメインの素朴な会食

風景が、記憶の底に不思議なほど鮮明だ。

広島菜は、濃い緑の幅広い葉が白菜よりも柔らかく結球する。漬けられた葉は、ちぎれることなく大きく広げることができて巻きずしにはおあつらえ向きである。戦後数年を経て、ようやくサツマイモご飯や麦飯から解放されるようになり、白米だけの広島菜漬の巻きずしが登場し、ひとしお忘れがたいふるさとの味覚となったのだった。しかしまもなく、なぜか村の畑から広島菜の姿は消えた。白菜の方が栽培しやすい土地柄だったのかもしれないし、他にもさまざまな漬物があり、海苔なども手に入りやすい時代の到来ゆえだったろうか、などと振り返ってみるのだが――。

また、広島菜とは関係なく、農村の機械化が進むに連れて田圃での会食もなくなった。

再び広島菜の漬物に出会ったのは、関東に住まうようになっていた昭和四十年代後半である。夫の兄からの贈り物だった。それは「広島名産」として立派な包装がされてはいたが、わたしの遠い素朴な記憶をぐいぐいと引っ張り出して、懐かしさがせり上がってきたのを憶えている。いつのまにかすっきり姿を消してしまつて、と気になっていた広島菜が、ますます健在であることを知ったわたしは、その胸のうちを夫に熱くまくし立てた。意外にも彼は、たしかに旨そうだけど昂奮するほどのもんじゃないだろう、と軽く笑い捨てた。

疎開者だった彼は食糧難の苦しみはあっても、農家の子供のような楽しみは味わっていなかったのだろう。それゆえ、能天気にあの当時は愚ぶことができないのだ、と気づいて自分の大人気なさに苦い思いをしたのだった。

ともあれ、その後「広島菜」の漬物は、わたしの帰省みやげの一つになったのだが、今はもっと深いところでわたしの心をとらえている。大学同期の小さな集まりのとき、友人から聞いた話がその発端である。学生時代には広島郊外から通っていた彼女も結婚後は関西に移り、わたしは関東でと、それぞれようやく子育てを終えたころだったろう。中学生だった兄上を原爆で失った彼女は、関西の地で、機会あるごとに「ひろしま」を語っているという。わたしも原爆で姉を亡くしているので、共通の思いがある。戦後十年ごろの学生時代には、だれもが身内の被爆については、まだ固く口を閉ざしていたのだが、お互いさまざまな場での体験を伝えることに踏み切っていた。

そのとき彼女は、「あの八月六日、広島近郊のある村から、出征していない男性全員が、建物疎開に駆り出されて全滅。そこで、遣された女性たちが広島菜を育てて生計を立て、命を繋いだって聞いたの。それからというもの、おみやげに買うようになったわ」とも話したのだ。ああ、そんな悲話があったのかと、わたしは以前にもまして、このみやげに心をとられるようになったのである。

たちであつたという。さまざまな栽培や名称の変遷を経て、特産「広島菜」に統一されたのは、昭和八年広島県産業奨励館で展示されたときからだったそう。この建物こそ、あの痛ましい姿の世界遺産・原爆ドームなのだ。遅ればせながら、奇しくも「広島菜」の真の歴史と出会ったような感慨を覚えた。同時に、わたしの記憶の中で奇妙にも戦後生まれだった「広島菜」の真実が、いま完全に解きほぐされた気分でもある。

ずっと以前には「広島菜漬」のパッケージに、原爆ドームの図柄が刷り込まれていた時期もあったらしいのだが、残念ながらわたしは目にしたことがない。わたしが再会する前に、すでに消えてしまっていたのだろう。

いま、インターネット上などに、広島名産としての「広島菜」の商品紹介や販路がさまざま載せられているのを見ながら、胸奥を何やら寂しさがよぎるのだ。戦後の食糧難の暮らしのなかで、子供心を豊かにしてくれたあの野菜が、ふるさとの特産としていよいよ盛んに生き続けているというのに、である。

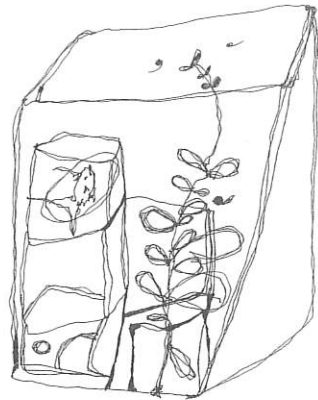
特産としてのびゆく「広島菜」の陰にある、あの日の事実も刻んでほしい、伝えてほしい。日本中に、いや世界中に。

敗戦色の濃くなる中、昭和二十年春から都市部で学童の集団疎開が始まった。また大都市が次々に焼夷弾攻撃を受け、限りなく多くの命が失われていく惨状の中、市街地に防火帯をつくるために軍から指定された街並みを強制撤去する建物疎開も始まったのだ。広島には海外出兵の拠点・宇品港があり、そのために大本営・師団司令部が置かれた軍都にされていたことから、建物疎開は緊急を要する重大事であつたのだろう。

あの八月六日、この一斉作業のため、近郊から「国民義勇隊」の名のもとに駆り出された男たち、夏休み返上の中、学生・女学生が総動員されて市の中心部に集められたのだ。そして彼らのすべてが、一瞬にしてあの閃光に灼かれてしまったのだ。

最近、調べてわかつたのだが、この日義勇隊として出動していたのは、近郊の川内村温井（現広島市安佐南区）の人たちであつたそう。あの日を境にして男手を完全に奪われた地区、当時の温井の女性たちの広島菜にかける思いが、あらためてずしんと重く胸底に落ちてきた。より具体的な実状を知り得たゆえだろうか、悲話を越えた厳しくも頼もしい女たちの物語として――。

また広島菜の誕生は江戸時代に遡るともいわれるほど、古くから栽培された野菜らしいが、明治になって京菜を持ち帰って品種改良を重ねたのは、やはり川内村の温井の人



岩田 アサコ Ashiko Izumi

星が峠から

星が峠から

星が峠に降った一粒の雨に自分を重ねていた。

木に当たり、岩にぶつかっても、最後は広い海に出る。
「いつかきっと」を信じて、ようやく光る海へ。
しかし、人生行路には予測のできない嵐が……。

日本文字部 定価（本体1,000円＋税） ノベル倶楽部



安芸 遥

あき はるか

1935 広島県生まれ
聾学校・小学校の教員を経験

「文芸思潮」銀華文学賞、第1回・第5回で奨励賞受賞

「文芸思潮」文芸出版賞受賞
岩波書店「定年後」、文藝春秋「ベストエッセイ集」、

文芸社「戦争とふるさと」

に作品が掲載され
自伝「星が峠から」、エッセイ集「ほほろを売る」を

出版

文章修行のほかに、仮想

日本一周の旅ウオークと音声訳ボランティアを楽しむ日々



受賞の言葉

安芸 遥

八月三日午後十時、「優秀賞に決定しました」との五十嵐編集長のお電話でした。「本当ですか?」、私が思わず口にした言葉です。しばしの間、この驚きとうれしさの瞬間を噛みしめてから、やっと「うれしいです。有難うございます」と言葉をつなぎました。

たまたま直前まで、広島からの電話でおしゃべりをしていたので。その最後に、「広島業のことをエッセイにしたの、最終選考までの連絡で終わ리と思うから、近いうちにプリントアウトして送るわ」と言ったら、「最終決定を見てからでいい、掲載されたらその本の方がいいもの」との言葉が返ってきた。「そうなるとうれしいけどね」と笑いながら受話器を置いたとたんの朗報、すっかり昂奮してしまつて、そのあと編集長に何をしゃべつたか、まっ

たく思い出せないのです。

「文芸思潮」が創刊されてから毎年、小説かエッセイを投稿していますが、ほとんどが三次予選まででした。そんななかで、短い小説で奨励賞を二回という励ましをいただきました。また、三次予選を通過した作品は読む人に何かを訴える力があり、人の心に何かが残リ新たな力になるはず、という選考委員会の講評にも励まされて書き続けてきました。

今回こんな喜びの瞬間を味わえたご褒美を宝とし、それを力にかえるようこれからも努力を重ねて参ります。有難うございました、そして今後ともよろしくご指導をお願いいたします。

サクラの木

優秀賞

第5回
文芸思潮
エッセイ賞

Essay

萩原ルイ子

今年で築三十八年となった思い出深いこの団地も、この四月、ついに取り壊されることが決まった。時の経つのは

あまりにも早い。父母と妹と一緒に三十八年前にここへ来て、十九年間暮らし、他へ移り住み、そして更に十九年が過ぎてしまったことになる。しばらくぶりに訪れた我が家にも、もはや住人はなく、今はがらんとする殺風景なマツチ箱のようだ。ここへ来れば記憶は瞬時に蘇るが、たとえあの窓からまた母が顔を出したとしても、それは幻で目の錯覚だ。ペランダからセキセイインコの賑やかなさえずりが聞こえてきても、それもやっぱり空耳なのだ。

そして我が家のはるか眼下にあったこのサクラも、今では枝葉が窓辺に迫るほどの立派な節くれだった大木となり、もうすぐ最後の、三十八回目の花を咲かせることだろう。

新しい高層マンションの建築計画にこのサクラの存続は含まれていない。

この木を見上げて考えることはあの頃の思い出の一つ一つで、それはアルバムのページをめくるように、次々と場面を変えていく。

ちょうど私が小学校へ上がる春のことだった。あの頃は昭和の高度経済成長の時代で、「鉄筋コンクリート」という言葉が耳にとても新鮮だった。私達家族は東京の小さな木造の家で借家住まいをしていたが、郊外の住宅供給公社の抽選に当たり、ここへ引越して来たのだった。新しく、大きな四角い白い団地から、ピカピカのランドセルを背負って小学校へ通って行くことが、私は嬉しくてたまらな

く、まるで体の芯から若葉が次々と芽吹いているような、眩しすぎる未来の中を一人滅茶苦茶にスキップしているような、そんな心持ちだった。

このサクラとの出会いもちようどそこが始まりだった。か細い苗木が敷地に二本植えられて、二気にはしゃぎ回る子どもたちの無邪気な被害にあっていた。春だというのに花は二つか三つしかなく、そのうち折れてしまいうような弱々しさだった。父はそんなサクラを不憫に思ったのか世話を始めた。ポロシャツにデニムの胸当てズボンで安物のサンダルをつっかけ、どこへでも気軽にひょいと出かける父だった。父はそんな格好で軍手にスコップを持ち、子どもたちの好奇心な目線と住人のいぶかしげな視線を集めながら、踏みつけられた地面をほぐしていった。初めは一人で穴掘り作業をしていたが、父はいつでも周囲を巻き込む天才だった。いつの間にか子どもたちの大将となって指揮をとっていた。父の号令で大きな子どもも小さな子どもも、子ども達は汗をかきかき肥料を漉き込み、駐車場からバケツリレーで水を汲み、柵を作り、「サクラの木」と札を立てた。まだ顔見知りになったばかりの子ども同士が力を合わせて汗を流し、いっぺんに友達になった。

こうして、ひよろひよると何とも心もとなないサクラの苗木は、みんなの「サクラの木」となり、夏には葉を繁らせ、また翌年には子どもたちの進級とともに花を咲かせて、花びらの海に吸い込まれそうな魔力があった。

住人は移り変わって、私たち家族も十九年前にここを離れた。そして五年前、父と再びここへ訪れた時のことは、母も私も一生忘れない。十二月にしては穏やかで暖かな日のことだった。評判の病院がこの近くにあると知り、やつと予約の日を迎えて車で二時間かけて病院へ出かけた。父の病は重く、久しぶりの外出に私達は家路を急いでいたのだが、どうしても立ち寄りたいと急に言い出した父に根負けし、かなりUターンしてここへ来た。冬枯れのサクラの下に車を止めて、後ろの座席の小さな窓から懐かしい我が家を見上げた父を、ことあるごとに思い出す。

しばらく無言で我が家を見上げ、「もういい」と眩くように言った。無理に戻ってよかったのだ。我が家をもう一度見たかった父に見せてあげることができたのは、この機会が最後だったということ、あとで知った。

ここで生まれた人もいれば、ここで亡くなられた方もいる。楽しいことや悲しいことも通り過ぎていった。だけど

育っていった。そして私も私の家族もここで育っていったのだ。

人それぞれの人生に青春があるように、家族には家族の青春がある。あの頃の若い父と母、幼い私と妹の四人家族はそんなサクラの苗木とともにここで暮らし、平凡な家族の平凡な暮らしの尊さを味わって、泣いたり笑ったりしながら十九年間の日々を過ごした。

父が自転車で出かけようと家を出る。自転車置き場でカギを忘れたことに気づく。このサクラの下に立ち、上を向いて手を叩く。料理屋で仲居さんを呼ぶように二拍パンパンと叩くのが父の合図だった。すると四階の我が家のキッチン窓から母が顔を出す。

私がまた自転車のカギを忘れる。私もサクラの下に立ち、上に向かって団地中に響き渡る大声で母を呼び、母は慌てて顔を出す。

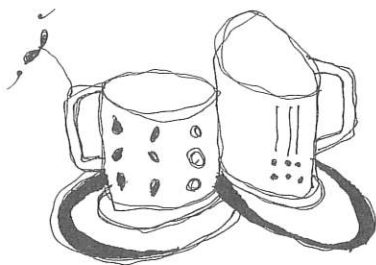
そんな風にこの窓から、母は自転車のカギや家のカギや上着やペンや、いろんな忘れ物を、多分ブツブツ言いながら紙袋に入れて何度も投げ落としてきた。

いちいち四階の家まで階段を上るのが億劫な、無精者でおちよこちよいな、似た者同士の家族だった。

忘れ物のたびに下から見上げていたサクラだが、上から見下ろす夜サクラはまた格別だった。そばにあった外灯よ

その間、サクラだけはどっしりここへ根をすえて、春には花を咲かせ人々の心を和ませて来た。桜の精が本当にいるとしたら、精の住み着く平均樹齢はいったい何歳くらいなのだろう。三十八年なんてまだまだ若造だと笑われるのだろうか。

私たちはこの桜の命を繋ぎたくなり、細い枝を持ち帰ることにした。できることならこの枝から、また新しい根を張り、芽をつけてほしい。家族の命が永遠に連鎖し、大きくなっていくように。



思いもよらず賞に選ばれ、ただ驚くばかりで実感が湧きません。久しぶりに思い出深いサクラを眺め、懐かしい人々と語り合ったことがきっかけで、何かの形で書き残したくなり、今回応募させていただきました。時々自分の中で巡らせていた断片的な思い出が、再び訪れたこの場所で、より立体的、連動的に浮かび上がり、人生の中に断片など一つもないことに気がきました。すべてが繋がって今日に至っているのです。ありふれた日常の繰り返しの有難さ、また、人生には節目があることをあらためて感じる今日この頃です。

不器用な私にサクラの繁殖ができるかどうか、図書館で



萩原 ルイ子

はぎはら るいこ

1964年生まれ

東京都荒川区出身

埼玉県さいたま市で育つ

83 埼玉県立浦和西高校卒業

88 跡見学園女子大学文学部卒業

死化粧

誕生月に市役所から市バスの無料乗車申請書が届いた。私は車の運転ができるので現在には必要ではないがもう七十歳、残りの人生はあと僅かですよ、と確認された思いがした。あらためて鏡の中の自分を見てみると、そこには気分とはうらはらな老けた姿がある。

これまで生きてきた証といえはそれまでだが、目の当たりにすると、誰も避けることはできない死の瞬間が確実に訪れることを知ることにもつながった。しかし、死を恐れているわけではない。どのような終末になるのかわからないのが、もどかしいのである。

私は看護師として四十八年間、看取った人は多いが、苦難の人生だったと思える人ほど最後の最後まで苦しみながら逝くことに気づいた。

借りた「サクラの育て方」と首っ引きです。元気そうな枝を長めに切り、切り口には濡れたティッシュを巻きつけて、大急ぎで家に帰り、バケツに浸ける。決められた長さに枝を短く切つてゆき、切り口に発根促進剤の粉末を付けて、鹿沼土に差す。

三月の芽吹き時に持ち帰った枝は、結局全滅、六月の枝は辛うじて二本だけ、貧弱ながらもまだ何とか頑張っています。そのうちの一本などは、初めの青葉がすっかり虫に食われてしまい、もうだめかと思った矢先に小さな芽が出て感激しました。今、おそらく土の中では二本とも、私の思いを果たそうと短い根っこが踏ん張り始めていることでしょう。

思いは過去から未来に繋がり、この小さなサクラが木になるところを、早くも想像しています。木の下で思いを巡らす自分は、どんな老人になっているのか、その老人はどんな人生を歩んで来たのか、自分にとって充実した人生とはどんな人生なのか、私はどんな人生を送りたいのか、そうするには今、どうすべきか、考えることはとりとめもなく時制を往き来し、そして私は自分の居場所を手探りしながら確認することになるのです。

末筆ながら、このたびはありがとうございました。

吉田徳子

その人の死後、処置をしながら神仏の不公平な仕打ちにいつも怒りが込み上げてきた。そして今も思い出すたびに心の痛む人がいる。

その人はハツ子さん。当時六十六歳、ハツ子と書いてハツネと読む。おそらく月初めの子の日に生まれ命名されたのだろう。身長は百三十七センチくらいで痩せている。強いO脚、大きめのスニーカーを履いて一歩一歩足をひきずるようにして歩く姿は、まるでゼンマイ仕掛けの人形のような。視力も弱く、分厚いレンズの中からギョロリとした目で見つめられると怖い感じもする。

ハツ子さんの病名は多発性神経線維腫、まれな病である。遺伝的背景があり、発病年齢は二十歳以下に多い。しかも眼球異常だけでなく、皮膚には色素沈着があり丘状の腫瘍

もある。そのため人目につきやすく、侮辱されることもあった。

ハツ子さんが私の勤務するB病院に来たのは平成三年の春であった。それまでは大学病院に入院していたのだが、主治医であるN医師がB病院に勤務することになり、ハツ子さんはN医師と同時に転院してきた。そのときの紹介状には、C型肝炎と肝硬変も記されていた。

心情として高齢になるほど生まれた土地が懐かしく、まして兄弟、知人の住む場所を求めるはずなのに、生家から三十キロも離れた不便な病院を選んだことと、見舞う人がないことがハツ子さんの環境のすべてを物語っているように思えた。

私たちはハツ子さんをハツちゃんと呼んだ。ハツちゃんは明るく、ころころとよく笑った。廊下で会うと短い手を上げて「へい」と挨拶をする。私たちが「へい」と答える。すると手をたたいて喜んだ。

ハツちゃんは週に一度来るN先生を待ち侘び、その日は朝から上機嫌である。結婚も出産もしていないが、ハツちゃんは息子に会えるような気持ちであったのかもしれない。しかし、ハツちゃんは明るい反面、短気なところもあり、他の患者や職員とささいなことでも口論となり、子どものように泣きわめいた。だが、一夜明けるとけろりとしていたので私たちは救われた。

車が出され部屋に運ばれベッドに移された。

「なんでこんな状態で退院になったの」

私が答めるような口調で言うとき、

「急に悪化したけど、B病院で治療をするのでと言われて……」

家政婦さんが代わって答えた。ハツちゃんは身の回りのことが出来なくなり、二日前から付き添っていたと言う。ハツちゃんの言葉はなく目で何かを伝えようとしているだけであった。

「ハツちゃんもう心配ないからね、家に帰ってきたのよ」
このようなどき何を言っても慰めでしかなく虚しいだけであった。

大学病院は研究機関のため、治療の必要がなくなると転院を勧められる。それにしてもこの状態で退院させたことが理解できなかった。

私の言葉にハツちゃんの臉がかすかにゆれ涙が流れた。それが返事のようにであった。

十月も終わり近くなつた頃から、黄疸はますます強くなり排尿もなく、利尿剤にも反応しなくなつた。脳症のためか幻覚症状も現れ、理解できない言葉をしきりに口にしたり。やがて興奮状態となり終日わめきながら、ベッドの柵を乗り越えんばかりに暴れた。いくら小柄であっても抑制は難しく鎮痛剤の効果もなかった。ハツちゃんは何に怒っ

入院して五ヶ月くらいは元気であったハツちゃんもやがて食欲がなくなり、お腹もだんだん膨らんできた。体のだるさを訴え、朝夕の散歩にも出かけなくなった。

精密検査の結果、肝臓の腫瘍が悪化、手術が必要と診断され、再び大学病院に転院することになったが心細いのか、N先生に

「先生、ときどき部屋にきてよ」

と、ハツちゃんは繰り返した。

だが外科で手術不可能と診断され、抗癌剤を腫瘍に直接注入する方法になった。この治療は副作用が強い長期入院になるだろうと思われた。

ところが一ヶ月後、大学病院から連絡があり、病状が安定、本人の希望で再びB病院に転院させますと連絡が入った。

再入院の日、予定の時間にタクシーが玄関に到着した。ドアを開けた瞬間ハツちゃんの変化に言葉が出なかった。

薬の副作用で顔は満月のように腫れあがり、皮膚は黄疸のため褐色になり苦痛に歪んでいた。お腹はまるで臨月のようであり座っているのがやつとのような状態であった。私は呼びかけた。

「ハツちゃん……」

返事はしたようであるが聞き取れなかった。急いで担走

ているのか。私たちはただ見守るだけで、かける言葉もなく手を握っていることしか出来なかった。

ハツちゃんは最後までベッドに横たわることなく逝つた。

ハツちゃんの人生とはいったい何だったのか。青春時代もなく病に苦しめられ、命が絶えるまで安らぎを与えられないままであった。

終末によく経験することがある。危篤状態となつていながら、逝く二、三日前くらいにそのまま快方にむかうのではと思われる時がある。それは神様が最後に与えてくれる時間であり、この世とあの世とを結ぶあわいの世界で、誰の心にも潜む妬みや、強欲など醜い思いを反省し、家族やなじみ深い人に感謝の言葉を伝えて安らかにこの世とのつながりを絶つための時と伝えられている。

しかし、ハツちゃんにその時間はなく死に顔は苦痛に歪んだままであったが、「ハツちゃん美顔マッサージだよ」と声をかけながら温かいタオルで顔を拭いているうちに穏やかな顔になった。

皮膚は黄疸のため褐色であったが、淡いピンクの口紅はよく似合った。紅をさしながら、ハツちゃんは今まで化粧をしたことがあったのだろうかと思った。もし初めての化粧なら、それが死化粧では哀れである。

他の看護師と一緒に体を清め、髪を整えたが旅立ちの着

替えがない。手持ちの浴衣から新しいのを選び左前にあわせ、心を込めて紐をしつかりと縦結びにした。
そして数時間後、たった一人の身内である甥が迎えにきた。

その後ハツちゃんがどのように弔われたのか遠く離れた地のため不明である。

ハツちゃんが逝って十八年、私も後どのくらい生きるだろうかと、限りある命を数える年齢になり、死化粧は誰がするのだろうかと思うときがある。家族によっては死者に手を触れるのを拒み、すべてを臨終に立ち会った看護師か葬儀社の人に任せてしまうこともある。

私は三人の娘だろうか。それとも妹か、いずれにしても不細工な私の顔をながめて、ああでもないこうでもないとなげやかにやってもらいたいものである。笑いながらの死化粧をやってもらうには、にくまれ口をたたきつつ強かに生き、見送る人に心残りのない極楽往生をしなければと思う。

どのような終末を迎えるか、それは誰にもわからないことであるが、自分の過去を手繰りよせてみたとき、神様の不公平さに不安がよぎる。

受賞の言葉

吉田徳子

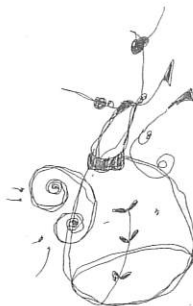
この度の受賞を知り、嬉しさより複雑な思いがしております。この作品を書くにあたり迷いがあったからです。ハツちゃんが逝って十八年の年月が経過しているとはいえ、プライベートにかかわることになるのではと悩みました。

しかし、ハツちゃんの残像が十八年間経っても消えることがないのなら形あるものにして、当時ハツ子さんとかかわりのあった同僚と会し思い出を語るのも供養になるのではと思いつきながら綴り応募しました。きっとハツさんが笑顔で許してくれるような気がして……。

今回はハツさんに励まされて書くことができたように思います。いつも趣味として文章を書くため、ひとりよがりの作品になり他の人の心に響くものを書けません。文章の作法も不勉強で上達せず、まあこんなところ、で済ませておりましたが今回の受賞は今後重圧となりますが、精進を重ね感動していただける作品をこころがけたいと思います。

ありがとうございました。

吉田徳子



よしだ のりこ

1955 中学校卒業と同時に開業医で見習い看護師として2年間勤務。その後町営診療所に就職、勤務しながら看護学校に通学し免許取得。町村合併、鳴門市との合併などあり、市立病院となる。規模は小さいが地域の信頼を得ている。定年退職後も三年間嘱託として勤務する。

昨年からは介護付きマンション内に併設されているデイサービスで利用者の健康指導を行っている。

家族 メタボの夫とメタボの犬(ラブラドル)二匹と近所の犬も住み着き、隣の猫が四匹何時も庭にたむろしている。娘三人。

小説

アルテイの城

てつしゅっぱん [鐵出版]

定価 1200 円 (税込み)

電話 0246-34-4372

いわき市平下大越字柳葉 78

小林忠明



東京経済刊
税込一四七〇円

数多くの小説を書き続け発表してきた著者がここに短編小説9作を同時に世に問う。昭和の青春、懸命に生きる人々の営みが、鮮やかに描き出される入魂の作品集である――

〒229-0035 神奈川県相模原市相生 2-6-15
外狩雅巳 電話 042-752-0169

天国の姉へ

HANA

悲しみの果てにはなにかあるのだろうか？

自ら命を絶った人間は天国へ行けないというのは本当だろうか？

その日、父は饒舌だった。

忙しさにかまけて、なかなか連絡をしていなかった父がひとりで暮らす実家へ、数ヶ月ぶりに電話をいれた。

「アタシ、久しぶりだけど元気？ そっちは変わりない？」

「ああ、変わりないよ。お前の方はどうなんだ？」

「アタシも変わりなくやってるよ」

他愛のない会話をしていたら、普段は無口で自分から話をしない父が

「久子が夢に出てきたんだよ」と話しだした。

久子とは八年前に亡くなった姉のことだ。

私たちは四人姉妹で育った。私は一番下。奇数組の姉たちは、その時、既に結婚をして嫁いでいて、実家で暮らししていたのは二番目の姉と私だけ。

両親は私が中学生の頃、離婚をし母は家を出て行った。

その後、母は再婚をしたらしいが、ガンで亡くなったと時間がたつてから風の便りで聞いた。

亡くなった姉は、両親の離婚後、仕事をやめ家に入り母親の代わりに家のことを始める。

元々、表へ出るのが苦手なタイプの性格だった姉は一年に数回、学生時代の友達と食事に行く程度で、遊びらしい遊びもせず、自分が欲しいものも買わずに父と私のために食事を作り洗濯をし、当時、病気で長い入院生活をしていた祖母の面倒もみていた。

祖母は姉のことをすごく可愛がっていて、二、三日、姉が姿を見せないと、どうしたんだろうと周りの人に言ってお心配をしていたらしい。姉の代わりに私が行っても、今日は久子は来ないのかい？ と言う程だった。

祖母が心配するからなるべく顔を見せるように看護婦さんに言われて、愚痴をこぼしながらも毎日のように祖母がいる病院へ通っていた。

その祖母もこの世を去った。

私は姉が家のことをやってくれるのをいいことに、仕事を理由に手伝いもせず自由に遊びに行ったり、仕事帰りに飲みに行つて夜遅くなることも頻繁にあり、よく姉に怒られた。姉に甘えきつていたので、今となっては遅すぎるが、後悔している。

そんな時、父の仕事がうまくいかず、私たちの知らないところでサラ金にお金を借りていたことがわかった。

時折あった知らない男からの返済の催促の電話は、間隔を狭め、頻繁にかかってくるようになり、最後の方には脅迫まがいの罵声の声へと電話は変化していく。

私たち家族は逃げるように家を出た。

普通の神経の持ち主でもサラ金に追われ家を失えば、心はダメージを受ける。

あの脅迫まがいの電話の声や、夜中に来た取立ての怒鳴り声の恐怖を忘れようと思っても今でも思い出してしまう。

仕事で昼間は外に出られる私や父と違って、姉はひとりで家にいて、その恐怖と戦いなおさら、私なんかより数倍、心のダメージを受けてしまっていたかもしれない。

家を失った私たち家族は、バラバラで暮らすことになった。父は取りあえずの住む場所を見つけ、姉は親戚の叔母の住む地方へ行くことになり、私もひとり暮らしをすることになったのだが、お金の問題やら大変だったこともあり、正直、父や姉のことにかまけてはいられなかった。

やっと自分も住む場所を手に入れたその時、叔母の所で暮らしているはずの姉が父の元へ戻ってきたことを聞いた。叔母の所へ行く時、見送りに行った私に姉は一通の手紙をくれた。そこには、頑張ってお金を貯めて、また一緒に暮らそう。そう書かれてあったのに、それが数ヶ月で帰ってきてしまうなんて、私は住む場所を見つけることさえ大変だったのに。

引越し費用がほとんどない私は、友達の家を転々とし、それでもできない時には会社で寝ることもあった。そうやってやっと引越し費用を貯め、住む所を見つけたのに、帰ってきたのは姉の単なる我侷わがままのような気がして、私はその時、姉を軽蔑した。

私と同様、親戚からも我侷だと姉は非難を受けた。

叔母の所で姉に何があったかはあれ以来、叔母とは姉の

ことで喧嘩をしまして、絶縁になってしまっているのだから。

きつと姉には姉の思うところがあつたんだろうと今では思う。

帰ってきた姉と初めて顔を合わせた時、まるで人が変わったような目をしていたのが怖かった。

姉が変わってしまったかのように変わったのは、叔母の所へ行つたことだけが原因ではないことはわかっている。こちで受けたダメージが少しずつ姉の心を蝕んでいったのではないだろうか。

ただ、あまりに生気のない姉の表情を見てしまったのが怖くて、私はその後から姉と連絡を取らなくなつてしまつた。

どれくらい経つた時だろう、父から連絡があり、姉が手首を切り病院へ入院したと聞いた時も、私は病院の前まで行つたが、あの姉の表情を思い出し、やはり姉には会わず帰つて、否、逃げてしまつた。

退院後、父と一緒に静かに暮らし始めた姉は精神科へ通い、少しずつ良くなっていったらしい。

働き口も探しはじめ、やつと、パートだが働くところが決まっていた矢先の自らの死。

その電話を父から受けた時、父は小さく、

姉が生きている時、楽しそうに何かをする姿を見たことがあつただろうか。辛いことを相談する友達はいたんだろうか。

思い出してみると、楽しそうに何かをする姿も、本当に辛いことを相談できる友達もなかつたように思える。

姉は孤独だったんじゃないだろうか。

父が見たのは夢ではなく今の姉の姿なんだと信じたかつた。

姉は私のことは、なにか言つてなかつたかと聞いたかつたが、言葉のをんだ。

たとえ夢でも、今姉が幸せな状況にいるならそれでいい。姉に対する私の罪は、遅いけどこれから償つていこう。

姉を忘れないことで……。

世の中には病気で苦しみ、生きたいのにそれができない人もいる。

自殺は当然、いけないことだと思う。

残された人達の悲しみ苦しみは、暗い深淵に突き落とされるようなもので、言葉では言い表せられない。

どんなことがあつても、姉のつた死という選択は間違つていない。

自ら命を絶つた人間は天国へは行けないというのも、実際、死んでしまつたら天国も地獄もないのが本当で、命を

「死んじまつたよ」

一言しか言わなかつた。

怒りと悲しみ……。

姉に対して、私に対して……。

駆けつけた病院で私はだれ彼かまわず当たり散らした。その怒りと悲しみをどこへ向けていいかわからなかつたのかもしれない。

病院から帰つてひとりの部屋で、今まで出なかつた涙が溢れ出てきて声をあげて泣いた。

もう八年前の話。

その姉が初めて父の夢に出てきたというのだ。とても鮮明な夢だつたらしく、きれいな花畑で姉は子供のよう走りまわつていたという。

「そんなに走つたらあぶない」

と父が声をかけると、

「大丈夫だよ。お父さん大丈夫だよ。こっちはすごく楽しくて友達もたくさんできた」

と嬉しそうに笑つて話してくれたそう。

「きつと知らせにきてくれたんだな。ずっと見てくれてんだよ」

そう話す父の声も嬉しそうに弾んでいた。

少しだけホツとした。

粗末にしてはいけないということをお教えるために、誰かが言つたんだろう。

でも、もし神様がいて、死を選ぶ人間の生きてきた過程を見ていたら、その人の悲しみや苦しみ、行つてきたことの全てをわかつて、天国か地獄への判断を下してくれるんじゃないかと思う。

姉はきつと、苦しんだ分、神様が天国行きの判断を下してくれたんだと思いたい。

父との電話を切つてから歩く夜道、涙が出てきた。

それは八年前と同じ怒り、悲しみの涙ではなく、天国へ行つた姉と同じ笑顔の涙だった。

そして、悲しみの果てには素晴らしい日々が待っていると感じた。





HANA

はな

1970年生まれ

東京都出身 東京都在住

89 国際ビジネス専門学校 高等課程卒業

同校卒業後、アパレル関係の販売員として働く、

その後、通販会社での事務職も経験

現在は派遣関係の会社で事務員として在職中

趣味は音楽を聴くことと散歩をすること

音楽はライブに行くことも楽しみのひとつ

最近では、散歩途中で見たことや人物、生活の中で思ったことをコツコツ書いていたりしています。

受賞の言葉

HANA

人は辛く悲しい出来事を、忘れる力を持っていて聞いたことがあります。だから悲しみに沈んだとしても、笑顔を取り戻し歩いていけると。

でも、ほんとうは忘れる力ではなく、癒せる力を持っているというのが正解ではないでしょうか。

悲しかった出来事は私の中で忘れ去られることなく残っています。特別なことをしたわけではないのに、日々過ぎていく中で当時の思い出は、尖った痛いものから丸い優しいものへと形が変化しているように思えます。変化しているからこそ、今回、書くことができたのではと。

このたびは優秀賞をいただきありがとうございます。

小さい頃から賞を付くものには縁遠かったのですが、ご連絡をいただいた時は本当に嬉しかったです。これを励みに、これからも自分の思うことを少しずつでも書いていこうと思います。

第5回
文芸思潮

エッセイ賞

社会批評賞

Essay

迷路をさまよう、わが国のロボット開発

田中 堅

私は、大学の工学部を卒業以来およそ四〇年間にわたって、草創期のわが国の産業用ロボットの開発と実用化に携わってきました。この間に、わが国の自動車産業をはじめとする各種工業製品の製造現場へのロボット導入は世界に冠たるものとなり、技術立国の面目躍如といった誇らしい状況に至りました。

私は、そのリーダーのひとりであったとの自負がありますが、ロボット開発の現場から退いてからのこの数年、近年のわが国ロボット開発について大いに疑問を感じています。

ここに、率直に私見を述べ、改善への提言をします。さて、近年のロボット開発は、これまでの製造業分野中

心から次第に非製造業分野へとシフトしつつあります。例えば、災害救助用ロボット、家事用ロボット、介護用ロボット、ペットロボット、エンターテインメントロボットなど多様な用途が対象になっています。

ところが、製造業分野では驚異的な実用化を達成したわが国ロボット開発が、これら非製造業分野の開発では一変して、未だにこれといった注目すべき実用化実績がほとんど達成されていないのが実態です。

にもかかわらず、これら非製造業用ロボットの話題は連日のようにマスコミで大きく取り上げられて、いまにも実用化されるのではないかと一般の人々には錯覚されかねないような活況を呈しています。私は、このことに大いに違和感を覚えるのです。

なかでも、人間の形をした二足歩行ロボット、人の筋力を補助する装具ロボット、寝たきりの患者に食事を補助する介護ロボット、サッカーをはじめ各種スポーツゲームを競うゲームロボット、そして体内検査ロボットなどが代表的なものです。

私は、このような非製造業分野ロボットの開発について、基本的な問題点があることを指摘します。

そのひとつは、二足歩行ロボットに代表されるように、ロボットを人間の形態に近づけようとすることです。これらのロボットがたとえ将来どんなに進歩したとしても、ロボットはとうてい人間には及びもつかない、まったく異質のものであることへの洞察が欠落しているのです。こんなロボットがどんな意味を持ち、どんな有用性を持つか、先の展望は全く見えません。このようなロボットの開発に膨大な資金と人材を投入することは大変な浪費なのです。

もうひとつは、ロボットを人間に接触させたり密着させていることです。ロボットはどこまで進んでも、モーターやコンピュータなど機械で動くものであり、所詮は予期せぬ突発的故障から完全に免れることはできないのです。そのため、人間密着型のロボットには常に人間に傷害を加えるという危険性が潜在しているのです。このようなロボットの開発は、開発そのものが原点から間違っているわけです。

以上、ふたつの基本的な間違いにより、多くの非製造業用ロボットがマスコミの話題にのみ終始し、現実の社会には受け入れられないのです。

このような現状は、私の目から見ると、まさに、迷路をさまよう、わが国のロボット開発としか言いようのない悲観的な状況なのです。なぜこのような間違ったロボット開発が進められるようになったのでしょうか？

それは、きわめて簡単なことなのです。すなわち、わが国ロボットの開発者たちの多くが、「真に現実的に有用なロボットとはどんなロボットか」という、ロボットに求められている真のニーズをとことん追求しないまま安易に開発に着手しているからです。

そこで、私は、ロボットの開発手法について改善提案をします。そのための基本的な考え方は、上記の問題点を克服することから、必然的に次のふたつに絞られます。

ひとつは、人間が得意とすること、人間が行うことに意味のあること、人間がやるほうが好ましいことなどはロボット化しないということです。さっそうと歩く人間、瞬発力あふれるサッカーや相撲などスポーツ選手、やさしく患者を介護する看護師など、この人間らしい挙動はロボット化する意味がまったくないのです。こんなことは、だれが考えてもすぐにはわかることなのです。

もうひとつは、人間に密着させたり接触させるロボットにもかわならず、現状の開発はほとんどこれらには目が向けられていないのです。その主な理由は、技術的に難しく、開発に多くの時間がかかるからです。

しかし、これはまったく本末転倒です。実用化の見通しもないロボットを技術的な興味や手取り早さだけで大金をかけて開発することは浪費以外の何物でもありません。

それより、たとえ技術的には困難であっても、真に必要とされるロボットにこそ貴重な資金と時間をかけて開発することこそ開発者に求められる姿勢であると考えます。

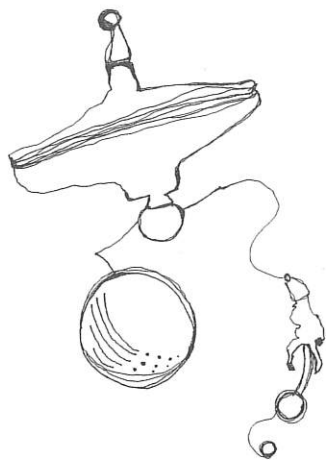
関係者の真剣な一考を促します。

それでは、どのようなロボットが真に必要なか、私の提言を述べます。

ひとつは、人間には絶対にできなくて有益なことを実行するロボットです。例えば、燃え盛る火災現場や地震で崩落の可能性大の現場、そして台風災害の濁流河川などへ突入して人命救助するロボット、いっどこで爆発するかもしれない地雷や不発弾を除去するロボットなどいくらでもあります。

もうひとつは、人間にとっては過酷な作業を、人間に接触することなく、人間に危害を及ぼすことなく安全に実行するロボットです。例えば、トイレ清掃、高層ビル清掃、フロア清掃、ごみ収集、あるいは、スポーツグラウンド・スタンド清掃・整備、河川の汚染物清掃、農地耕作・収穫作業、除雪作業、除草作業、ガス・水道漏れ補修作業、アスベスト除去作業など、考えればいくらでもあります。

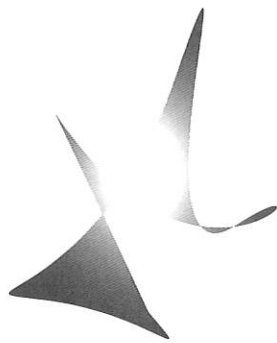
このように真に必要なとされるロボットは多種多様にある





田中 堅

たなか けん
1962 大阪大学工学部機械工
学科卒業
川崎重工業にて産業用ロボ
ット「川崎ユニメート」の国
産化技術開発に従事
その後独立して、ロボティ
ックホライズンを開設、代表
取締役役に就任
特殊なロボット開発に10
年間専念
定年後は、企業・官庁など
で技術指導、現在に至る



受賞の言葉

田中 堅

わが国産業用ロボット開発の草分けの一端を担った者として、最近のロボット開発の貧困さにどうしても一言苦言を呈し、あるべき道へ軌道修正願いたい思いで書いた一文が評価され、こうして掲載されることになり誠に有難く思っています。

ご承知のとおり、ロボットの開発には大変な資金と人材と期間が必要です。当然のことながら、こうして開発されたロボットは実社会の中で役に立つものでなければなりません。

逆に言うならば、開発の目標として真つ先に「実用化」という条件をしっかりと掲げなければなりません。

ところが、最近のロボット開発には、最も大切なこの条件が欠落しているため、開発はしてみたものの使い道のわからない迷子のロボットが氾濫している有様です。

特に、最近流行の「ロボットコンテスト」は見るに耐えません。これから社会を担って行く学生たちにお遊びロボットを作らせて競技をさせている主催者には猛省を促したいと思います。

本場に必要ならロボットらしいロボットを求めている社会現場はたくさんあります。ここにしっかりと目標を定め、その開発のためにこそ貴重な資源を活用願いたいものです。

そのような意味で、私のこの一文がお役に立てば幸いです。

第5回
文芸思潮
エッセイ賞

社会批評賞

昨日 今日 そして明日

島 人志

二〇〇八年六月八日 日曜日 東京・秋葉原。人で混みあう歩行者天国に、二トントラックが突っこみ、人を撥ねた。犯人は車を乗り捨て、手にしたナイフを振り回しながら走りぬき、次々と人を切りつけた。死者七名、重軽傷者十名。

六月七日 土曜日 僕は友達と二人で、職場近くの居酒屋にいた。いつものようにパチンコの話や、仕事の愚痴を言い合いながら飲んでた。ある程度話題も尽きた頃、何気なしに互いに電話を掛けて、暇している友達を呼び出した。その友達が来ては、また別の友達を呼んでと、いつの間にか総勢九名の飲み会になっていた。なかには初対面なんて人もいたし、正社員・期間社員・派遣社員と雇用形態

もバラバラであった。それでも、みんな、同じ工場の同じ課で、ただ部署が違うだけであった。挨拶もそこそこに乾杯が済めば、酒も進み話は互いの職場の上司、持ち場の工程の話で「あーでもない、こーでもない」といつもの如くヒートアップしていった。気がつくや十二時過ぎ、誰ともなく「二次会、カラオケに行こー！」の一声で、タクシードカラオケボックスへと流れ込む。けっこうみんな飲んでいたので、場は異様な盛り上がりだった。しかし、なぜだか空騒ぎ感、虚無感が立ち込めていた。明らかに、先週会社から大量解雇の話が聞かされ、その場の半数が該当者だったことが原因である。みんな驚きと、焦りと、先行きの不安感を隠せなかった。だけど今日は、誰もそのことには触れずにいた。とにかく飲んで、歌って、騒いで忘れたか

った。帰りはタクシーが捕まらなくて、歩いて寮まで帰った。寮に着くと同時に雨が降り出した。

六月八日 日曜日 やはりというか、当然というか二日酔いで頭はガンガンするし、脱水症状で喉はガラガラだ。昼過ぎに、どうにか布団から這い出してテレビをつけて、ただポケッとしていた。夕方くらいからだろうか、やたらとテロップでニュース速報が流れる……何やら事件みたい……でも二日酔いで気分が悪いんだ……明日の仕事も早いし、いつもより早めに横になる。

六月九日 月曜日 午前四時半起床。朝飯を作り、昼用に残りを弁当箱に詰める。さてと、また一週間が始まるか。一人気合を入れて、さあ仕事だ。朝早いのに、会社の近くに見慣れないスーツ姿の人たちがちらほら……。職場に着くとなんだかいつもと雰囲気が違う、妙にざわついている。「おい！ 知ってる？」「なにが？」「日曜のニュース速報で流れていた事件、犯人が反対直の塗装課のヤツだという話だ」「えーっ！」と一瞬驚いたが、どこかで、やっぱり、と思う僕がいた。

僕は車の組み立て・加工工場に派遣社員として勤めていた。工場での勤務は、昼勤・夜勤を一週間交代で行い、生

産は1:1分に一台が組み上がる流れ作業の仕事である。

大体定時間で四〇〇台弱、残業最高2.5時間で五二〇台弱を造る。毎日毎日、同じ部品を同じ所に黙々と同じ様に組み上げていく。僕の知っている限り、同じ工程を四年以上やっているなんて人もいた。同じ作業ばかりというのは、かなり大変だけど慣れてくると自然に体が動いてくれるものである。だから、ポオートとしていたほうが、意外と時間の経つのを早く感じたりする。長く勤めていればいるほど、みんな同じように「あんま、なんも考えないでやる」それが仕事のコツだなんて言う。

朝は職場に着くと、赤文字の名札を裏返して黒文字にする。すると上司はそれを見てその日の出欠状況を確認する。そして鐘が鳴ると朝礼の始まりだ。それから各々の持ち場について生産開始だ！二時間後、鐘が鳴り十分間の休憩があり、再び二時間後に鐘が鳴ると前半終了、四五分間の昼休みだ。工場内の食堂に行くもの、事前に買っておいたコンビニ飯、飯抜き、各自勝手気ままな昼休みだ。鐘が鳴ると午後の仕事が始まる。そして、二時間後に鐘が鳴り十分間の休憩、鐘が鳴り一時間半で定時間となる。連続二直で日勤ならこれにて終了だ。夜勤のときは、月の生産台数次第で残業がある。五月は生産台数も多かったし、トラブル等で後半は挽回計画だと、残業も多くて夜勤はけっこうキツかった。

そんな感じの職場だったから、誰とも口々に話をきくこともなく難なく仕事はこなせてしまう。帰りにコンビニで食い物を調達し、そのまま家に帰れば、丸一日誰とも話さないこともできる。僕らの場合、寮は会社の借り上げたアパートで一人部屋、二人部屋、三人部屋とタイプがあった。

今時は、はじめから一人部屋を希望する人が多いみたいだ。僕の部屋は二人部屋であったけれど、隣の子が反対直なら生活パターンが逆になるので、意外と顔を合わせることはない。実際、半年くらい隣の部屋に誰かがいる気配はするけれど、一度も顔を見ないうちに契約満期でいなくなったなんて人もいた。人間嫌いの人間不信、そんな人にならまさしく、おあつらえ向きな環境だ。

僕は、人間関係の煩わしさと面倒臭さから故郷を離れたくて、とにかく遠くへと願い、見ず知らずの場所へと逃げ出してきた。最初の頃は、この必要以上に干渉しないで話さなくてもいいという状況がものすごくありがたかった。それでも三ヶ月が過ぎ、少しずつ寂しさも募ると、人恋しくなったりする。どんなに人を遠ざけようとしても、なにかと構ってくる人もいる。そうして半年も経てば、週末に飲んだりする仲間が数人できたりする。いろいろな場所から、いろいろな人が、いろいろな事情でなぜだかここに流れてきた。人が嫌いになったはずなのに、再び人と触れ合うことでいろいろと考えさせられた。

僕だけが大変な苦勞をしてきたと思っていた。

僕の仕事が一番キツイんだと思っていた。

人と話して、飲んで愚痴って喧嘩して、身につまされる。誰だって苦勞しているんだ。仕事がキツイだなんてあたり前。生きるって大変なんだ。わかっていたつもりだけど、すっかり忘れていた。いくら意見が割れて対立したって、翌日にはケロッとしている時もある。それっきりで仲違いになったとしても、人は人に出会うのだ。その繰り返しの、どこにいても……。

「店員さんいい人だった。人間と話すのっていいね」

通り魔犯が携帯のサイトに幾多の書き込みをしたうちのこの一文、それがすごく気になった。おそらくその店員さんは、いつものように接客して話をしただけだと思う。特別に変わったことはしていない。しかし、彼はそうは思わなかった。

受け入れたのだろうか 何を？

受け止めたのだろうか 何かを？

受賞の言葉

島 人志

今回、拙文「昨日 今日 そして明日」が社会批評賞に
なったという報せを受け、大きな驚きとともに私自身の強
い励みになりました。

ありがとうございます。

あの出来事は、私のこれまでの人生において非常に考え
させられたことでありました。あの頃の私もまた、半ば自
暴自棄であり何もかもに嫌気がさしていた時期であったか
らです。それでも、私は人と出会い、関わることでたくさ
んのことを学び、繋がりを実感できました。あのリストラ
は私にとっては、自分を取り戻すための契機だと思ってい
ます。そんな時に、残しておくべき重要な記憶・記録
というエッセイ募集の言葉に惹かれ、あの時の気持ちをも
にか形にしなければという思いで書き上げました。

雑誌に掲載されるといのは初めてのことであり、たく
さんの方に読んでいただけるというのは恥ずかしさ反面、
嬉しさでいっぱいです。そして、読んでくださった方々が
なにかを感じ取ってもらえたら幸いです。
本当に、どうもありがとうございました。

多分彼は感じたんだ、人と人との温もりを……。なぜ、
それまでそんなふうに思えなかったの？ なぜ？ なぜ？
なぜ？

人はみな一人だ。たとえ親兄妹血縁者だろうと自分以外
は他の人、そう他人だ。誰だって孤独なんだ。しかし、決
して一人で生きていくわけじゃない。人は人との関わり
なかでしか生きてはいけない。

彼の「心の闇」なんて、僕にはわからない。どんなに誰
かのせい、なにかのせい、社会のせいにしたって最後に決
めるのはいつだって自分なはず。自分が自分で自分の道を
歩むしかない。遂げた成功、犯した失敗を積み重ね、幾多
の人と出会い、分かち合い、衝突し別れ去られようと人も
はまた、人を求め合うしかない。彼に絶対的に不足してい
たもの、それは「会話」ではなかったのかと僕は思う。

会話とは、互いに向かい合い話し合うこと。

話し合うとは、互いに話すこと。

話すとは、言葉で伝え口で述べること。

互いに認め合い、受け入れられる。ひとりよがりじゃなくて、
思いやること。

どんなに考えてみても、僕には彼があのような凶行にで

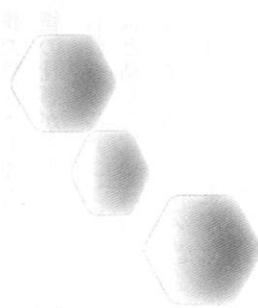
たことが納得できないし、許せない。しかし、僕自身はど
うだったのだろうか。孤独で寂しくて虚しくて、すべてを
恨んではいなかったのか。

いまさらながらに思う……。もしかしたら、彼は僕であっ
たのではないのか。

二〇〇九年二月 僕もついにリストラされました。三十
代後半で無職です。

すべてが嫌になり逃げ出して、人を避けてきた。けれど
また人に会うことで思い出し、取り戻せたはず。まだ間に
あうかな……。いや、まだ間にあうはず。

いまだからこそ思う……。「ガンバレ、俺！」



島 人志

しま ひとし

1969 沖縄県生まれ
沖縄で育つ
派遣で自動車工場勤務
現在無職

文芸思潮臨時増刊号

エッセイ宇宙 4

THE ESSAY COSMOS

第5回「文芸思潮」エッセイ賞作品集

第5回エッセイ賞の輝く作品を集めた豊かなエッセイ集
エッセイ宇宙が豊かに広がります 2009.12 月下旬発売

掲載ご希望の方はまだ間に合います。ご連絡ください。

アジア文化社

950 円 + 税

ご注文はアジア文化社まで TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848